

HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界 大百科 事典

14

シャーシュ

平凡社



世界大百科事典 14

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人 下中邦彦
発行所 平凡社
郵便番号102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話03(265)0451番

本文用紙 十条製紙株式会社
グラビア用紙 山陽国策パルプ株式会社
多色オフ 見返用紙 日清紡績株式会社

本文写植製版 フォト印刷株式会社
本文印刷 株式会社東京印書館
グラビア製版印刷 株式会社東京印書館
多色オフ 株式会社光村原色版印刷所

クロース ダイニック株式会社
表紙箔押 斎藤商会
製本 和田製本工業株式会社

●見出しのつけ方●

〈表音見出し〉

1. 日本読みのものは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのものは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

〈本見出し〉

1. 日本読みのものは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のものはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本読みと外国読みとの合成したものは、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

〈項目配列の方法〉

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のものは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能なかぎり現地読みに近いものをとったが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字へのおきかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o x=k χ=ch
 - b. ロシア語
a=a б=b в=v г=g д=d
e=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
o=o п=p р=r с=s т=t
y=u ф=f х=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ь=' ы=y
ъ=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。

berg[スウェーデン]〈ベリー〉 Strind-
berg ストリンドベリー
cu[スペイン]〈クァ・グィ・グェ・グォ〉
Ecuador エクアドル
d[独]語末では〈ト〉 Wieland ヴィー
ラント
de[仏]〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール
dou[仏]〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル
du[英・仏]〈デュ〉 Durand デューラン
ド; Dumas デュマ
du[独]〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト
er[英・独]語末では〈アー〉 Parker
パーカー; Herder ヘルダー
g[独]語末では〈ク〉, ngは〈ング〉, ig
は〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク;
Lessing レッシング; König ケーニヒ
gn[仏・伊・スペイン]〈ニャ・ニュ・ニ
ェ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニ
ュ; Bologna ボローニャ

gu[伊・スペイン]〈グァ・グィ・グェ・グォ〉 Paraguay パラグアイ
ia[一般]語末では〈イア〉 Asia アジ
ア
io[伊]〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカ
ッチョ; Giorgione ジョルジョーネ
j[スペイン]〈ハ行音〉 Juárez フアレ
ス
je[一般]〈イエ〉 Jena イェーナ
ley[英]〈リー〉 Huxley ハクスリー
ll[スペイン]〈リャ・リョ〉, 南アメリ
カでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カステ
リャ; Trujillo トルヒョ
oi, oy[仏]〈オワ〉 Boileau ボワロー
pf[独]〈プ〉 Pfitzer プィツナー
ph[ギリシア]〈フ〉 Aristophanes ア
リストファネス
qu[伊・ラテン]〈クァ・クィ・クェ・
クォ〉 Quirinius クィリニウス
ray[英]〈レー〉 Thackeray サッカレ
son[英]〈ソン〉 Edison エディソン
sp, st[独]語頭では〈シュプ・シュト〉
Spranger シュプランガー; Storm
シュトルム
stew, stu[英]〈スチュ〉 Stewart ス
チュアート; Stuart スチュアート
swi[英]〈スウィ〉 Swift スウィフト
thi, ti[一般]〈ティ〉 Thiers ティエ
ール; Tiziano ティツィアーノ
thu, tu[独・ラテン]〈トゥ〉 Tum-
lirz トウムリルツ; Tacitus タキ
トゥス
thü, tü[独]〈チュ〉 Thurnau チュ
ルナウ
tou[仏]〈トゥー〉 Toulon トゥーロン
tu[英・仏]〈チュ〉 Tunisia チュニア
v[ラテン]〈ウ〉 Vergilius ウェルギ
リウス
v[スペイン]〈バ行音〉 Verasquez ベ
ラスケス
w[独]〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー
x[一般]〈クス〉 Xenophon クセノ
フ
オン
y[ギリシア]〈ユ〉(拗音) Dionysos
ディオニッソス
zi[独]〈チ〉 Leipzig ライプツヒ; た
だし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann
ツィンマーマン
zi[伊]〈ツィ〉 Venezia ヴェネツィ
ア
zü[独]〈チュ〉 Zürich チューリ
ヒ

●符号・記号●

〈かこみと送り〉

- 【 】 中見出し語をかこむ。
〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢
字および本文中の小見出し語をか
こむ。
〈 〉 書名または題名をかこむ。

- 〈 〉 引用文または語句，とくに注意を
うながす語，書名または題名以外
の編または章などの表題をかこむ。
() 注の類，または読みがなをかこむ。
[] 日本地名の国・県・区・市・町・
村をかこむ。
⇨ 該当項目への送り
⇨ 参照項目への送り

〈漢字略語〉

国名・地名の略語を用いる場合は，つぎ
の13種にかぎって使用する。

アメリカ(米)；イギリス(英)；イタリ
ア(伊)；インド(印)；オーストラリア
(豪)；オランダ(蘭)；ソヴェト(ソ)；
中国(中)；ドイツ(独)；日本(日)；フ
ランス(仏)；モンゴル(蒙)；ヨーロッ
パ(欧)

ただし，戦争，会議，協定など特定の場
合にかぎって

アジア(亜)；アフリカ(阿)；オースト
リア(澳)；トルコ(土)；プロイセン
(普)；ロシア(露)

などの略語も用いる。

〈科学記号または略符号〉

a	アール
A	アンペア
Å	オングストローム (=10 ⁻¹⁰ mm)
A. D.	紀元後
atm	気圧
Aufl.	版
[α] _D ²⁰	比旋光度(20℃における ナトリウム D線に対し)
B.	湾
bar	バール
B. C.	紀元前
Bé	ボーメ度
BTU	英熱量
c	サイクル
C.	岬
℃	摂氏温度
ca.	年数の大約を示す。
cal	カロリー
Cal	大カロリー
cgs	絶対単位
cm	センチメートル(cm ² 平方 センチ，cm ³ 立方センチ)
const	定数
d	デシ(=1/10)
d ¹⁵	比重(15℃における)
d-	右旋
D.	砂漠
dB	デシベル
deg	度(温度)
dyn, dyne	ダイン
E	東経
emu	電磁単位
eV	電子ボルト

F	ファラッド
°F	華氏温度
ft	フィート(ft ² 平方フィー ト，ft ³ 立方フィート)
g	グラム
G	ギガ(=10 ⁹)
G.	湾
gwt	グラム重
h	時
ha	ヘクタール
HP	馬力
Hz	ヘルツ
in	インチ(in ² 平方インチ， in ³ 立方インチ)
I.	島
Is.	諸島(列島)
IU	国際単位
k	キロ(=10 ³)
K	絶対温度
kc	キロサイクル
kcal	キロカロリー
kg	キログラム
km	キロメートル(km ² 平方キ ロ)
kV	キロボルト
kW	キロワット
kWh	キロワット時
l	リットル
l-	左旋
L.	湖
lb	ポンド
lm	ルーメン
l. t	ロング・トン
lx	ルクス
m	メートルまたは分
m-	メタ
M	メガ(=10 ⁶)
Mc	メガサイクル
mb	ミリバール
mg	ミリグラム
mks	mks単位
mm	ミリメートル

mmHg	水銀柱の高さ(mm)
mol	モル
Mt.	山
Mts.	山脈，山地
mμ	ミリミクロン(=10 ⁻⁹ m)
μ	ミクロまたはマイクロ (=10 ⁻⁶)
μ	ミクロンまたはミュー (=10 ⁻⁶ m)
μμ	ミクロミクロンまたはミ ューミュー(=10 ⁻¹² m)， ただしmμをμμとも記す。
n	ナノ(=10 ⁻⁹)
n ¹⁵ _D	屈折率(15℃におけるナ トリウム D線に対し)
N	規定，または北緯
Nr.	号，または番
o-	オルト
oz	オンス
p	ピコ(=10 ⁻¹²)
p-	パラ
P.	半島
pH	水素イオン濃度指数
ppm	ピーピーエム(=10 ⁻⁶)
PS	メートル馬力
R.	川
rpm(h)(s)	1分(時)(秒)間回転数
S	南緯
S.	海
sまたはsec	秒
s. t	ショート・トン
St.	海峡
t	トン
V	ボルト
W	ワット，または西経
Ω	オーム
/	生没年などの年数の両説 を示す。
%	パーセント
‰	パーミル
♂	雄
♀	雌

〈地図記号〉

記 号	各 国 地 図	分 県 地 図
	国境	県境
	省・州・県境	
	鉄道	国鉄
	特殊軌道	私鉄
	運河	特殊軌道
	主要道路	国道
	パイプライン	鉄道連絡線航路
	首都	都道府県庁所在地
	主都(省・州・県)	市
	大都市	
	中都市	町
	小都市・町，その他	村・字，その他
	山頂	山頂
	峠	峠

注 その他慣用化している記号は適宜使用した

別刷図版目次

釈迦	13～14
シャガール	79～80
写真	113～120
シャルトル聖堂	169～170
ジャワ	187～188
シュルレアリスム	509～512

しゃ 社 本来、中国における原始的
社会集団の中心となる標識であり、転じ
てその祀(まつり)をなす集団そのものを
さした。その標識とは、封つまり土壇で、
その上に神象として主を立てたものであ
る。主は木をたばねてこれに血塗ったの
がその原初の形態であり、のちに樹木を
植えたり、石を立てたりしてこれに代え
たと考えられている。社は古くより土地
神とする説が有力であるが、叢林(そう
りん)崇拜起源説や、聖地の聖力崇拜起
源説や、また生殖器官崇拜起源説なども
なえられている。近くはその集団の始祖
を祀ったとする説もあるが、ともかくあ
る時期まで合一されていた祖と社とが、
やがて太廟(たいびょう)と社稷(しゃし
く)へ分離するにいたったことは事実と
認められる。その分離後、社が稷と連用
され、社稷が土地神ないし土穀神と考え
られ、地域的政治集団の守護神としての
性格を明確にしてくるとともに、社稷の
名で国家をも意味するようになってい
る。こうした形の社は、秦漢以後、行政組
織にのっとった序列が定められ、その祀
は一つの国家の儀典となった。社稷壇は
その遺制である。他方民間においては、
社の祀は依然として村落の中心的行事と
して、その団結の精神的支柱となってい
た。そのために社をもって方6里一乗の
地、あるいは25家とか、100家とかの組織
として、これを国家の行政の末端におこ
うとする考えも生まれた。それをおし進
めたのは、後代の元朝であって、県の下
の村落を分けて、原則として50家をも
って1社を組織させ、勸農事業の推進と治
安の確保とを社長の任務とし、また別に
社学を設け、社師をして農民の教化にあ
たらせた。こうした上からする村落統制
策に社が利用されたのは、一つにはその
基盤にそれ以前から別の形の社が存在し
ていたためと考えられる。さかのぼって
六朝(りくちょう)あたりから、慧遠(えお
ん)の白蓮社に代表される仏教信仰による
誦経(じゅきょう)、齋会(さいえ)、修
寺、造仏などを目的とした、義邑(ぎきゆう)、
法社などの民衆自体による結社が生まれ、
それがしだいに他の目的のための結社へ
と発展し、さらに危機に際しての自衛の
ための結社、あるいは反国家的な秘密結
社へと転化してきていた。元朝による社
制の設置は、こうした傾向の利用である
とともに、またそれへの対抗策でもあ
った。しかし明以後においても、社とか会
とかと呼ばれる、こうした多種多様な結
社はひきつづいて存在しており、そこ
から今の社会という言葉も生まれてきた。
→社稷 (松本 善海)

しゃ 紗 綱(からみ)織物の一種。先
秦の古書に「素紗」と見え、漢末には「沙
縠(くく)」とあり、縠は「これを視れば
粟(あわ)大の空孔があく。またこれを沙
ともよび、手にとれば沙のような感触が
ある」と訓じ、沙縠は今の薄地の縮緬(ち
りめん)と解される。また漢代の墓や、中
央アジアから六朝末から唐代にわたって
出る羅(ら)は、紗に似ているが今の紗と
は違うものである。10世紀末ころには無
文紗とともに有文紗が織られ、技術の分
化も益々多様である。明代には金箔(きんぱく)
糸を刺繍(ししゅう)したり、

あるいは織り込むなど、雅趣あるものが
でき、やがて縞(ろ)織を産するに至った。
日本の正倉院には羅の遺品は多いが、紗
はいたってすくなく、いくつかの屏風(び
ょうぶ)に額文紗を見るのみである。延
喜式の織部司の条に見える紗は今の無文
紗と解される。西本願寺蔵の《三十六人
集》の表紙に2種の額文紗を見るのみで
なく、畛島の《平家納経》宝塔品には紗
のあとが残っており、このころの貴族の
服飾に広く用いられたことが諸書に見え
る。黄色の紗は五山の長老の衣に用いら
れ、南北朝ころの書には素紗(すじゃ)、
三法紗などが見える。また金箔糸で優雅
な唐草(からくさ)を繡(ぬ)った縫金、金
紗などは袈裟(けさ)や書画の表装に賞用
された。江戸時代の初期に古田織部が京
の竹屋町ではじめた縫金紗は、世にこれ
を「竹屋町」とよんでいる。また16世紀
の初め明人が大阪の堺に来て金紗を織り、
銭屋と松屋がこれを習い織った。1744年
(延享1)には西陣の株仲間が紗組があり、
1730年代には桐生で紗を織るのに成功し
た。紗の透薄性は夏の衣料として広く賞
用される。(太田 英蔵)

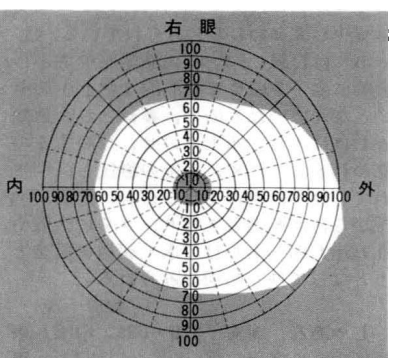
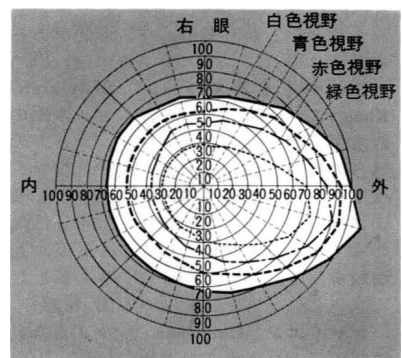
しゃ 赦 恩赦(おんしゃ)を、古くは
「赦」と呼び、顕宗天皇の1年(485)正月
に施行されたものが記録上もっとも古い。
律令には赦そのものに関する規定はない
が、赦に関連する規定が多数あり、大化
(645～650)以来の実例によると、常赦(律
に常赦に免ぜずと規定した罪、および、
八虐・殺人・通貨偽造・強盗窃を除き、
未決・既決を問わずいっさいの罪をゆる
す)、大赦(常赦に免ぜずとあるもの以外
の罪をゆるす)、非常赦(いっさいの罪を
ゆるす)、曲赦(1地方に限られた常赦、
大赦)などが行われた。赦は天皇の権限
で、国家皇室に祥瑞(しょうずい)、慶賀、
災異などのあるときに天皇が民と喜びを
わかち、災異をはらうために行った。中
国思想の影響で、吉兆による赦が多く行
われたが、後には朝廷が仏教を尊崇して
乱発し、かえって治安を乱した。中世に
入ると、朝廷のほかにも幕府も赦を令す
ようになり、室町時代以後は幕府が専行
した。江戸時代においては幕・藩とも赦
の制度はおおいに整備され、幕府では18
62年(文久2)に「赦律(しゃりつ)」とい
う33条の小法典が制定されている。幕府
の赦は將軍の権限で、朝廷・幕府の吉凶
に際して発せられ、吉事の赦を御祝儀(ご
しゅうぎ)の赦といい、法事の場合に追善
供養のためなされるのを御法事の赦とい
ってしばしば行われている。既決受刑者
だけでなく未決の者も対象とし、これを

当座の赦という。法事の赦は、受刑者の
親類が両山(徳川家菩提寺の寛永寺、増
上寺)に赦を願い、両山からその名を記
載した回赦帳を幕府に回付し、老中が裁
決して、法事執行の寺で町奉行(ぶきょ
う)が赦を言い渡し、大僧正の教戒があ
ってその場で放免したのである。赦は一定
年限の刑期が経過していることと、改悛
(かいしゅん)、謹慎の情いぢるしいこ
とが条件で、犯罪者の改善を奨励するこ
とを主眼としたが、遠島(えんとう)や追
放など、無期の刑罰については、赦の運
用によって刑期を量定する機能をはたし
た。藩においても、幕府の赦の令にした
がうほか、自家の吉凶に際し赦を施行し
た。明治維新以後、天皇は赦の権限を回
復し、1868年(明治1)1月の大赦をは
じめとして以後たびたび恩赦を行ない、治
罪法(1880)、帝国憲法(1889)、刑事訴訟法
(1890)、恩赦令(1912)の制定によって近
代的恩赦制度が整えられた。→恩赦

(平松 義郎)

しや 視野 一点を注視して目を動か
さないで見ることでできる範囲を視野と
いう。われわれが外界のものを見るとき、
視線の方向にあるものは最もはっきりと
見えるが、まわりにあるものははっきり
とは見えない。前者の範囲を中心視野と
いい、後者を周辺視野という。視野の広
さは視線を基準として角度をもって表わ
す。視野の広さは色によって異なり、白
色視野が最も広く、ついで青色、赤(黄)
色で、緑色視野が最も狭い。白色視野を
ふつう単に視野と呼ぶが、健常視野は上
方と内方が最も狭く、外下方が最も広い。
注視点の外方15°、下方3°の位置に、ほぼ
円形の欠損部がある。これをマリョット
Mariotte盲点と称し、眼底の視神経乳頭
の部に相当する。周辺視野の測定にはフ
ェルスターFörster視野計を、中心視野
の測定にはプエルムByernum平面視野計
を用いる。注視点を重ねて両眼視野の合
図を作ると、半径約60°のほぼ円形の視野
ができる。これを両眼視野といい、両眼
視可能な範囲である。視野の変状のおも
なものは、狭窄(きょうさく)と暗点の出現
である。視野の測定は、眼底疾患や視
路疾患の診断に欠くことができない。

【視野計】視野の周辺部を測定する視野
計をペリメーターperimeterといい、中
心部を測定する視野計を平面視野計cam
pimeterという。ペリメーターにはフ
ェルスターの原型を初めとして、種々の改
良型があるが、要するに、被検眼を中心
とした半球面または半円弓に目盛を施し
たもので、被検眼で中心の目標を注視さ
せておき、白色あるいは色視標を動かし



左、健常視野の広さ(石
原忍測定)。右は同心視
野狭窄で、白い部分が
視野。網膜色素変性、
緑内障の後期、ヒステ
リーなどのときに起る

て見る範囲を測定するものである。平面視野計は中心部を精査するため球面の度を平板に投射したもので、測定方法は上記と同様である。

【視野欠損】視野の欠損には、視野狭窄と暗点とがある。視野狭窄には、また、周辺全体からしだいに欠損してくる同心狭窄、視野周辺の一部あるいは数ヵ所から欠損してくる不規則狭窄、注視点を境界として両眼の視野の右半部あるいは左半部が欠損する半盲狭窄の別がある。暗点とは視野内にある島状の欠損部である。マリオット盲点もその一つである。存在場所によって中心暗点、盲点中心暗点、周辺暗点、輪状暗点などの別があり、その程度によって絶対暗点、相対暗点に区別される。また暗点を患者が自覚するか否かによって、実性暗点と虚性暗点を分けることもできる。両眼の視野の一致した場所に相似た暗点が発生した場合は半盲性暗点という。→半盲 →暗点

(萩原 朗)

シャー Shāh 近世ペルシア語の名詞で、シャーフともよむ。ゼンド語のクシヤ Khshaya、サンスクリットのクシ Kṣi (Kṣayati)に由来し、王・皇帝・君主・イランの支配者の称号を意味するほか、神秘主義修道者の称号や、チェスの王・王手、新郎などの意味もあり、形容詞的用法として、偉大な、最良の、最高の、などの意味もある。皇帝・君主の意味には、シャーのほか、パート pāt (王座)に由来するパード pād、パード pbād と結合したパードシャー pādshāh、パードシャー bādshāh も用いられる。イスラム圏ではほぼ同義のアラビア語のマリク Malik (Mālik, Malik) やスルタンが広く通用したが、一方、近世ペルシア語がイスラム圏の宮廷語として重用されたため、シャーの系統の称号は、単にイラン諸王だけでなく、トルコやインドのイスラム諸王朝の君主たちの称号ともなり、とくにイラン諸王朝の帝王たちは、民族的自覚のもとにシャーハン・シャー (諸王の王)と誇称した。

(田坂 興道)

シャー Shear ⇨ 剪(せん)断加工

しゃあ 大分県臼杵(うすき)市北部の津留(つる)部落の漁民をさす俗称。1605年(慶長10)に安芸国能地(のうじ)村(広島県三原市幸崎(さいさき)町字能地)からこの地に移住した平家の舎人(とねり)である車者の子孫だという伝説をもち、〈しゃあ〉という言葉もこの車者から出ているといわれる。能地の漁民と共通点の多いのは事実であるが、古代の海産物採取者である海部の民との関係を明らかにしなければ、その出所についての問題は解決しえないものとみられている。〈しゃあ〉は打瀬(うたせ)網漁業を専業とし、漁船に妻子をのせて漂泊的な水上生活をいとなんでいたもので、妻はとれた魚類をおけに入れて頭上のにせ、行商するのをつねとしたため、よその漁民と区別されていたが、現在ではしだいに打瀬網漁業から行商船業者となり、さらに大阪や北九州方面へ出かけて水上運送の賃金とりとなってゆく傾向がみられる。

(牧田 茂)

しゃあん 謝安 320～385 中国、東晋朝中期の名臣。字(あざな)は安石。東

晋最大の名族の一つである陳郡陽夏(河南省太康県)の謝氏の出身。中年にいたるまで会稽に住居して、王羲之(おうぎ)らと交わり風流をこととしていたが、のち建康貴族の支持を受けて仕官し、征西大將軍桓温(かんおん)の幕下に入り、ついで吏部尚書の要職にすすみ、帝位を奪おうとする桓温の野望を阻止した。桓温の死後宰相となったが、ときに前秦王苻堅(ふけん)が100万と号する大軍をひきいて南下するのを防ぎ、383年(太元8)兄の子謝玄をして苻堅の軍を淝水(ひすい)の戦で撃破し、苻堅の雄図を粉碎して国難をまぬかれさせた。のち2年にして病死した。(西嶋 定生)

しゃい 写意 主として東洋画において、〈写生〉に対していわれる言葉で、その意味するところは、絵画の目的は対象の形状をありのままに精密に描写すること(形似)ではなく、対象に触発され、あるいはそれに託する画家の心情(意)を表現することとでなければならないとする主張をあらわすもの。形似のほかに精神的なものを画に求める主張は古くからあったが、多くは対象に即し、あるいは付随するものであった。ところが中国の北宋中期になると、すでに前からきざしていた詩画一致の主張、書画一致の考え方、人品高く学殖ゆたかな者の手になる画をたっとぶ風潮などを基盤として、芸術的に洗練された知識人、すなわち当時の文人たちは、専門画家の精工に過ぎる画技をけいべつ排撃し、形似にとられず、自己の意思を率直簡明に表出する画を理想とし、粗放な形式の水墨画をもってこの理想を実践した。〈画を見るに形似をもってするは、その見、児童と隣す〉という有名な蘇軾(そしやく)の言は、写意の主張を端的に表明したものである。またこの主張に適合する、簡略な描写の画体そのものをさして、写意とよぶ場合もある。→写生 (川上 溍)

ジャイアンツコーズウェー Giant's Causeway アイルランド島北東部、北アイルランド、ポートラッシュ Portrush の東北東約10kmの地点からベンバン・ヘッド Benbane Head の突端まで海岸沿いに約5kmにわたって、玄武岩の角柱がならんでいる。これを巨人がアイルランドからスコットランドへ渡るためにつくった道であるという伝説からジャイアンツ・コーズウェー(巨人の盛土道の意)と名づけ、〈巨人の劇場〉〈巨人のいす〉〈巨人のオルガン〉などとも呼ばれる。これらの玄武岩は第三紀に噴出したものであって、角柱の直径は40～50cmである。ポートラッシュから電車・バスの便がある。(浮田 典良)

シャーイスタハーン Shāyistah Khān ?～1694 インド、ムガル帝国の政治家。第6代の皇帝アウラングゼーブの母方の叔父。1660年デカン総督となりシヴァージーの急襲を受けて負傷した。ついでミール・ジュムラ Mīr Jumlah に代わってベンガル総督としてポルトガル人海賊を平定し、65年チャッタゴンを占領した。(石田 保昭)

シャイエーン Cheyenne アメリカ合衆国北西部、ワイオミング州の州都。人口

46,677(1975推定)。同州南東隅、ロッキー山脈の東端にあたり、標高約1,800mの地点にある。牛・羊の取引、鉄道、航空路の中心地で、精油所、鉄道工場、航空機修理工場がある。町は1867年に鉄道の分岐点として建設されたが、69年にはこの地方の政治の中心地となった。翌70年には付近のブラック・ヒルズに金鉱が発見され、急速に発展し、90年には州政府の所在地となった。(関口 武)

ジャイサルメル Jaisalmer インド共和国西部、ラージャスターン州西部、タール砂漠南部のステップ地帯の中心にある町。人口約8,000。建物はずべて黄かっ色の砂岩を材料としており、町全体が砂漠の町らしい色彩とふんい気とをかもしだしている。現在では、ジョドプルから分れる鉄道支線の終点ボカランからバスの便がある。この町の有名な城は、1156年、ジャイサル王の建設にかかるもので、この地はパーティ・ラージプートの王国の支配の中心地としてつづいてきた。砂漠の交通の中枢地として商業上重要な役割を演じてきたが、最近、石油や他の鉱物資源で付近は新しく注目されている。(荒 松雄)

シャイシュナーガちょう シャイシュナーガ朝 前6世紀の後半に東インドのマガダ地方(現在のビハール州南部)に台頭し、前4世紀の初めころまで君臨した王朝。この王朝の祖をシュナーガ Śiśu-nāga といい、その名にちなんで後世の王朝をシャイシュナーガ Śaiśunāga とよんだ。マガダ王国最初の王朝で、ピンピサーラ、その子アジャータシャトルの時代に強大になった。はじめラージャグリハ(王舎城)に都したが、のちパータリプトラ(現在のパトナ近郊)に移った。これ以後パータリプトラは東インドにおける文化の中心地として栄えた。この王朝の時代におけるマガダ王国の政治、文化などはまったくわからない。(岩本 裕)

シャイデマン Philipp Scheidemann 1865～1939 ドイツの政治家、社会主義者。カッセルで生まれ、印刷工となり、早くからドイツ社会民主党に加入し、1911年には党幹部に選出された。現実主義の政治家であり、マルクス主義修正派の立場をとり、第一次世界大戦にはドイツ政府を支持し、17年4月、党内左派を排除した。18年10月バーデン公マックスの内閣に無任所大臣となり、11月9日の革命にさいしては、いち早く共和制を布告し社会主義政党のみによる組閣を宣言して大衆の急進化を食いとめた。臨時革命政權(人民代表委員会)の中心人物となり、19年2月から6月までドイツ共和国最初の議会内閣首相。ヴェルサイユ条約に反対して辞職し、1920～25年にはカッセル市長となったが、33年ナチ政權成立後に亡命し、コペンハーゲンで死去した。(村瀬 興雄)

シャイナー Christoph Scheiner 1575～1650 ドイツの天文学者。カトリックの神父で1611年に望遠鏡によって太陽像を投影して、太陽面の観測をすることを考案し、太陽黒点および白斑を発見したといわれる。同年、当時としては詳しい月面図を作成した。(海野 和二郎)

ジャイナきょう ジャイナ教 インドの1宗教。アーリヤ人種が侵入する以前にすでにインドにおこっていた出家主義の宗教が後世に発達したもので、仏教と姉妹教である。ジャイナ教Jainismは、正しくはジナ教Jinaismという。ジナJinaというのは勝利者の意味で、煩惱(ぼんのう)に打ち勝った解脱者をさす。この宗教は人生苦から解脱することを教えるもので、仏教とまったくおなじ目的をもち、今日もインドにおこなわれている。

開祖マハーヴィーラMahāvīra(大雄)は出家以前の名をヴァルダマーナVardhamānaといい、クシャトリア(刹帝利)出でジュナータJñāta族である関係から、ジュナータプトラJñātaputraともよばれ、仏教ではこの名でよばれている。父はシッダールタSiddhārtha、母はトリシャールTrīśālāといい、父母ともにジナ教の前身であるパールシュヴァナータPārśvanāthaの教えの熱心な信者であった。彼は一説にはヤショーダーYaśodāと結婚し、アノージャーAnojjāという娘をもうけた。30歳のときに父母が死んだので家督をついだ長兄の許可をうけて出家苦行し、13ヵ月後に裸形となり、12年の苦行の結果ジナとなり、ジナ教の伝説によると彼より250年以前に生存していた教祖のパールシュヴァナータにつき、24番目の教祖ティールタンカラTīrthamkaraになった。その後42年間の宗教活動によって多くの弟子と信者を得、仏教とおなじく当時のビンピサーウ王とその子阿闍世(あじせ)王の保護をうけた。そして72歳で今のパトナ地方で涅槃(ねはん)した。その年は伝説では前527年となっているが、新しい研究では前467年である。したがって仏教の開祖の仏陀(ぶつだ)とだいたい同時代の人で、この涅槃の年はジナ教の歴史年代の基準となっている。

【経典】ジナ教の教理は現在伝わっている経典によっているが、11の《アンガ》Anga、12の《ウパーンガ》Upāngaを中心とする大部のもので、大雄の死後980年に定められ、そのなかには教理の歴史的变化発展がみえてインド宗教史研究上重要な地位をしめている。だがこれらの経典はジナ教の1派である白衣派の伝えるもので、一方の裸行派では同名の経典が存在していたことは認めるが、すでに散失して伝わらないとして、ほかに西暦後600年以後にできたと思われる《四吠陀(ヴェーダ)》と自称する聖典をもっている。しかし両派ともだいたい教理は一致している。

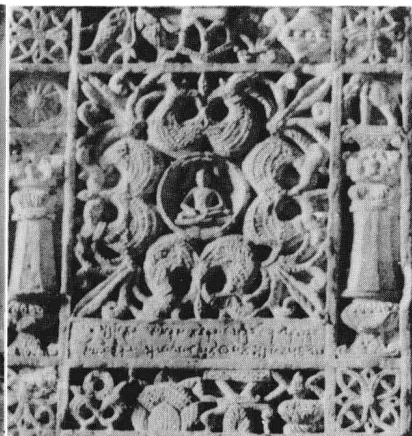
【教理】ジナ教は他のインド宗教とおなじように、ジナ教独特の世界形體観をもっている。人間の住む世界は全世界の中央にある円形の中央世界とよぶものの一部で、そこから上部は11層の天界で神が住み、その上に完全解脱者が永久に住む世界がある。中央界の下は地獄(7層46階840万の地獄)界でここで生類は地獄の苦しみをうける。以上の全体を世界lokaとよび、これは濃水・濃風・薄風の3層につつまれ、これより外部の空間はすべて非世界alokaとよばれ存在する事物は全くない。この全世界を土台としてジナ教は命jīva、非命ajīva、福punya、罪pāpa、漏āsrava、縛bandha、遮(しゃ)saṃvara、断nirjarā、解脱mokṣaの九諦

(たい)説(裸行派は福と罪をのぞく七諦説)を立てて全教理を総説する。はじめの〈命〉は生類と生命の実体の意味の二つに混同されている。生類には1感官をもつものから5感官をもつものまであって、1感官の生類は地・風・火・水の元素で触覚だけをもつもので、5感官の生類は動物・人間・神などである。そして世界lokaはこれら生類で充満している。生類は天界の上に住む完全解脱者をのぞいて他は天の神をもよくめてすべて輪廻(りんね)していて、動くもの動かぬもの、将来解脱しうるもの、解脱不可能なものに分類され、その行為の結果にしたがって、天界と地獄のあいだを輪廻する。しかし命の実体は清浄な解脱体で絶対智(ち)と無限の能力をもっているが、過去の業(ごう)によってけがれていて、不自由と苦をうけるのである。またこの命はその全身に充満して身体と同一の大きさで、前世の行為、すなわち業のいかんによっていろいろちがった色彩をしている。つぎの〈非命〉は命とおなじく不滅の存在で、生命なきものが総括されて、虚空(くう)・法・非法・時・物質の五つである。虚空は世界と非世界に遍満する空間で、無数の空間単位ブラデーシャpradeśaからなっている。法は運動を可能にする仲介的な、非法は静止を可能にする、時は変化を可能にする、それぞれの原理である。物質は地水火風のそれぞれの1元素とその2元素ないし多元素の結合体で、各一つずつの命が内在するものと考えられている。この微細な物質からなると考えられるものにさらに業がある。その種類は148あり、それがいかに命に影響するかによって8種に大別される。行為はその結果として業をつくり、これが命の中にはいつて福や罪の作用をなし、一般に命を重くして輪廻の原因となる。この業はあやまって業体karmaśarīraを形成し、命はこれとともにつぎの世間にゆき、その業力によって新しい身体と運命のもとに生活するのである。この業物質はその結果があらわれると消滅するが、業には長いあいだ結果を生じないで命の中にとどまるものがあるので、道徳的生活や修行によって消さねば永遠に解脱することはできない。この間、業物質が命の中に侵入するのを諦(う)ちく漏(く)ろい、命を拘束して本来の力を発揮させずに輪廻させることを〈縛(くわ)る〉という。これに反して正しい道徳生活や苦行によって業物質の侵入を止めるのを〈遮(く)る〉、さら



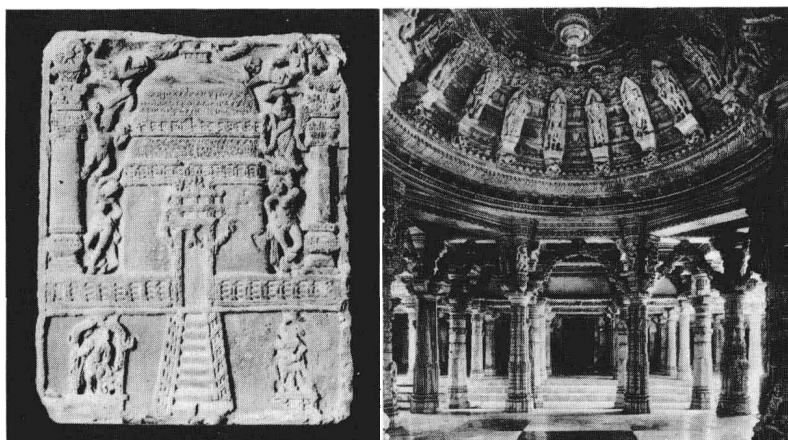
ジャイナ教 シャルト
ルンジャヤ山上のジャ
イナ教寺院。16～17世
紀の建築

にすではいった業物質を破壊することを〈断(くわ)る〉、最後に到達する完全自由な状態を〈解脱(げつた)〉というのである。ジナ教は仏教の仏・法・僧の三宝に対して、正見・正知・正行を三宝とよんで、その標識としている。正しい信仰と知識と修行の意味でその教理全体をあらわしている。解脱をするには出家するのが正道で、出家するためには、まず5握りの頭髪を自分の頭からむしりとりて懺悔(ざんげ)し、無害・真実言・不盗・梵行・無所得の五つの大禁戒mahāvratāをうけ守らねばならない。無害は意識的にはもちろんのこと、無意識的にもいっさいの生物を傷害することを禁じ、真実言は無意識的にもまた冗談にも不真実な言葉をはかない。不盗は与えられないものはとらないだけでなく、与えられたものもさらにことわってとる。梵行は性交を絶対にせぬばかりでなく、口にも心にも性に関する事物をしりぞけ、その危険あるものをあらかじめ避けねばならない。無所得は、事實は布施によって得た最小限の必要物は所有するが、心にはいっさいの所得をすてるばかりでなく、いっさいの世間の事物に対して無執着でなければならない。このうち、無害は仏教のものに比較して全く徹底的なもので、ジナ教の特色の一つである。上述のように全世界は生物で充満しているとするので、この禁戒はほとんど世間の生活を不可能にするもので、彼らが楊枝(ようじ)をもちいず、清水を飲まず、一種のマスクをつけ、道をゆくときに地を掃くために一種の箒(ほうき)をもちいるのは、みな微生物を殺さないためである。また最後の無所得は大雄がすでに裸行したのみでなく、後世裸行派を生じ、さらに一



ジャイナ教 左はジャ
イナ教の尼僧。右はマ
トゥラーの奉獻板に描
かれているジナ像。1
世紀

ジャイナ教美術 左はマトゥラー出土の奉獻板に見えるストゥーパ。ストゥーパの左右に記念柱を建て、周囲にかきねや門をつくっている(1世紀)。右はアーブー山のテージャーパーラ寺の内部。1197～1247



方、自殺を否定しているにもかかわらず、唯一の所有物である身体をも、断食によって自発的にすることを導く行為とし、いまなお高僧がこの方法で洞窟(どうくつ)内で死んでゆく事実が報告されている。これらは出家道を極度に強調した結果で、ジナ教が今日なおインドに存在する重要な原因とされている。この点は仏教とおもしろい対象をなしている。出家の実際上の修行の中心は苦行tapasで、これは内外の二つにわけられている。外苦行とは(1)断食、(2)一部食、(3)時と出所と状態による食物の限定、(4)美食をとらず、(5)感官の誘惑になるすべてのものを避けること、(6)激寒激暑の坐禅(ざぜん)と身を養生せぬことと身を掻(か)かず唾(つば)をもちかず身を苦しめること、の六つで、内苦行とは(1)師前の懺悔、(2)崇敬、(3)師・出家・僧団・在家・病人に対する奉仕、(4)学問、(5)身体・欲望・外的誘惑の捨棄、(6)禪定、の六つの精神的苦行である。出家教団を外から援助しているのは在家の団体である。在家の人は出家の大禁戒を緩和した五つの小戒anuvrataをうける。すなわち生物を意識的に殺さず、偽りをいわず、他人のものを盗まず、正しい性生活をなし、新たに所有物を求めず意識的に所有を限定してそれ以下で満足するのである。この小戒には、つぎの三つの補足的禁戒gunavrataが加わる。(1)旅行区域の限定、(2)生活に必要な事物の限定、(3)無益に他を害せぬというので、これにさらに四つの学習禁戒がおこなわれる。すなわち(1)朝昼夜3度48分ないし144分間心の安静をおこない、(2)一定期間1ヵ所にどまって特定の食をもちない、(3)毎月幾度か一日中断食して出家生活する、(4)客人や出家に布施する。さらに熱心な信者は毎月新月・

満月・8日・14日の断食、動植物の食をとらず、日没後つねに絶対に食をとらず、性交を完全に断ち、生物を害する可能性ある企業をおこなわず、財産や奴婢(ぬひ)を放棄、自分のためにあらかじめ準備された食をとらず、出家の衣を着て寺院やその他の静寂の地に住するなどの、11のプラティマーpratimāをおこなって出家に近い生活をするを進めるのである。

【分派と現状】大雄の開宗以来ジナ教は代々の王者によって現在まで消長してきたが、現在も大別して白衣・裸行(空衣)の2派に分れている。教理はだいたいおなじであるが以下の点で違っている。白衣派のほうでは、(1)パータリプトラ結集(けつじゅう)の経典は現存する、(2)女性も解脱が可能で、(3)大雄は結婚して女兒がある、(4)祖師は白衣を着た姿が正しい、(5)最高解脱者kevalaも食をとると主張する。これに対して裸行派のほうではこれらを全面的に否定する。それぞれの分派についてのべると、白衣派では昔は84の部派gacchaがあったとするが、現在では祖師の像を崇拜するタパーTapa、カラタラKharatara、アンチャラAncaraなどがあり、像をもちないものにスターナカヴァーシーSthānakavāsīとテラーパンティーTerāpanthīが有名である。裸行派のほうではビスパンティーBispānthī、タランパンティーTaranpanthī、グマーンパンティーGumānpānthī、トーパーパンティーTopāpanthīなどがある。信者は全インドに散布しているが、1961年の国勢調査報告によると、全体で200万をかぞえ、ボンベイ、マドラス、マイソール、ラージャスターンに多い。信者は数としては少ないが、財的に有力者が多いのでその割には活発である。

(松澤 誠康)

ジャイナきょうびじゅつ ジャイナ教美術 ジャイナ教の起源は仏教と同じく古い、その美術は仏教のそれにくらべて、質量ともにはるかに劣っている。

〔建築〕ジャイナ教美術のなかでもっとも特色あるものは建築の装飾的彫刻といえよう。古代の初めには、仏教のばあいとおなじようにストゥーパが数多く建てられた。その形はだいたい仏教のストゥーパと同様であるが、欄楯(らんじゅん)をもった繞(にょう)道路は基台の部分だけではなく、覆鉢(ふくぼち)の周囲にも2段になっており、全部で3重になっている点がちがっている。このようなストゥーパは現存しないが、マトゥラー出土の浮彫(前1世紀ころ)にそれが見られる。また仏教のスタンパー(独立の石柱)に似た記念柱も多く建てられた。僧堂としての窟院(くつゐん)は前2世紀ころから中世にかけて多数掘られ、ウダギリ、カンダギリなどの窟院は前2～1世紀で、その他7世紀以後の遺構に、エローラー、バーダーミの諸窟、ブヴァネスワル、ならびにカティアール地方の諸窟などがある。これら窟院は多く突出した前廊をもっており、前面に精巧な装飾彫刻のあるのが特色である。寺院建築はヒンドゥー教のそれに似て、本殿にヴィマナ形の高塔を作る。中央の堂の周囲に多数の小堂を建て、おびただしい祠堂(しどう)の集りで寺院を形成するのが普通である。寺院はラージプターナから西インドにかけて多いが、なかでもラージプターナ南西部にあるアーブー山の寺院は代表的である。そこのヴィマラ寺(ca.1032)とテージャーパーラ寺(1197～1247)とは、どちらも総大理石で、内部はジャイナ教寺院中でも最も豪華である。列柱をもつ広間に円天井があり、天井、柱、その他の部分がすべて繊細をきわめた装飾的彫刻でおおわれているのはジャイナ教寺院の特色である。それは白い大理石の質感と相まって軽快華麗なレース細工をおもわせる。また、円天井の周辺には多数の女神像も刻まれている。

〔彫像〕寺院には開祖マハーヴィーラやその他の祖師の像がおかれている。それらはスタンパーにもしばしばつけられる。その形はだいたい仏陀(ぶつだ)像に似せて作られているが、多くは空衣派の主旨にもとづき全裸に表現されている。座像と立像とがあり、座像は足を組み両手はひざの上に重ね、立像は正面向きに直立し両手は体側に垂下する姿勢にきまっている。表現様式には作者の個人差は多少見られるが、時代や地方による様式の相違はほとんど見られない。要するに像の表現は画一的で単調で、仏陀像にしばしば見られるような芸術的にすぐれたものは見あたらない。現在ジャイナ教はラージプターナや西インド地方におこなわれるが、もとはもっと広範囲であったので、彫像の分布範囲はかなり広い。ことに南インドには巨像が多く、最大の作品はマイソール州、スラヴァナベルゴラにある像で(ca.983)、高さおよそ17m余、片麻岩で作られている。それにつぐものは南カナラのカルカラと、イエヌールにある像であるが、前者は13m(1432年)、後者は11m(1604年)の高さである。いずれも芸術的に高くはないが、巨大さの中に一

ジャイナ教美術 〈カルバーストラ〉写本のミニチュア。15世紀



種の威厳をもっている。彫像はすべて中世以後のものである。

〔絵画〕壁画は少ないが、比較的古いものが残っている。マドラス付近のシッタナヴァーサルのもの(グプタ朝末),エローラーのインドラ・サブハー窟のもの(9世紀),マドラス付近のティルマライのもの(11世紀)などがそれである。しかし特色のあるのは西インドのグジャラートにおける写本のミニアチュールで、経典や物語本にさし絵である。表現は類型的で変化に乏しいが、その造形にはきわめて特異なものがあり、ここにも装飾的な傾向が濃厚に見られる。構図は画面填充(てんじゅう)式で、背景の山、雲、樹木、水などはたくみに形式化せられている。人物の形態はことに異色があり、胸がふくらみ腰は細く、とくに顔が角ばり、鼻が長くとり、目が大きく飛び出ている容ぼうに著しい特色がある。ミニアチュール共通の色彩のあざやかさや線の流麗さもあるが、とくに線の自由な表現は注目される。(上野 照夫)

シャイバーニー Muhammad Shaybānī Khān 1451～1510 トランスオクシアナを征服したウズベク族のカン(汗。在位ca.1505～10)。アブル・ハイルの孫。ジュチの第4子で13世紀半ばころ青帳カン国の祖となったといわれるシェイバンSheiban(昔班)。シャイバーニーはこのシェイバンのイラン風(の呼称)の子孫で、ティムール朝末期の混乱に乗じて、数年の間にトランスオクシアナ地方を征服(1501)し、フェルガナ、ホレズム、ホラサーンを合わせ、カブルに迫る一方、カザフ族と争い、中央アジアに支配権をふるった。しかしやがてサファヴィー朝の始祖シャー・イスマーイール1世と戦って、メルヴ付近で敗死した。

(羽田 明)

シャイバーニーちょう シャイバーニー朝 シャイバーニーがウズベク族をひきいてトランスオクシアナを征服して建てた王朝(ca.1505～99)。この王朝では一族を各地に分封し、その最年長者がカン(汗)位についたから、首都は一定しなかったが、サマルカンドとブハラが中心的な位置を占めた。1555年以来ブハラの主であり、1583～98年までカン位にあったアブドゥッラー2世の治世が黄金時代で、当時の領域は北はトルクスタニ市から南はアム・ダリヤ流域、東はカシュガル、ホータンから西はカスピ海の南岸地方におよんだ。しかしその死後は内乱、サファヴィー朝のシャー・アッバースの攻撃、カザフ族の侵入などのためにたちまち混乱状態となり、99年ブハラ・カン国にとって代わられた。(羽田 明)

シャイフ Shaikh アラビア語の名詞で、本来はおよそ50歳以上の男子を意味したが、転じて部族の首長、さらに転じて長老・老師・精神的指導者・修道僧団長などの称号となった。中国文献では「沙亦黑」などと音訳する。イスラム以前からアラブ人社会では、部族のシャイフは各部族の成員により選挙され、平時の支配者・戦時の指揮官として絶対的権威を有し、すこぶる尊敬された。イスラム以後、このほか種々の世俗的・宗教的尊称

として広く用いられるようになった。たとえば、カリフの別称シャイフ・アル・ムーミニーン(信徒の首長)をはじめ、シャイフ・アル・ハラム(聖地の首長)とか、シャイフ・アル・イスラム(イスラムの長老。主教。中国文献では回回太師)とか、などである。ただしシャイフ・アル・イスラムは、とくにオスマン帝国では、イスラム指導理念の指示者として最高権威を付与され、イスラム聖法を根拠とする彼の意見は、帝国の君主の行動をも拘束するほどの権能をもっていた。

(田坂 興道)

ジャイプル Jaipur インド共和国西部、ラージャスターン州の主都。人口615,258(1971調)。商業の中心地で、また黄銅、玉(きょく)、宝石、象牙(そうげ)などの細工物の伝統的技術をもって知られる。市街は方形道路を中心に淡紅色の画一的な家屋が並び、中央に壮大な王宮があり、インドの諸都市中異彩を放っている。王宮は北8kmにあるアンベールの旧王宮とともにインドのラージャの支配権力を象徴する歴史的遺物で、なかでもハワ・マハル(風の王宮)や天文観測台は有名である。1728年ジャイ・シング2世Jai Singh IIによって、アンベールにかわってジャイプル旧土侯国の首都として建設された。(荒 松雄)

ジャイミニ Jaimini 前2世紀ころに活動したインドの哲学者。彼の思想を中心に諸説を集めて1世紀ころ「ミーマーンサー・スートラ」が作られたので、一般にミーマーンサー学派の開祖とみなされている。このスートラによるとこの学派はヴェーダ聖典の命ずる祭事の研究と実行とを主とし、その教説をひろい義務という意味のダルマ(法)の1語に包括し、哲学説においてもヴェーダの知識のみを絶対に普遍妥当的なものとして観念本有論、声(こゑ)常住論をとる。しかしジャイミニは祭事のみで知られる学者ではなく、「ウパニシャッド」の文章に通じブラフマンの研究を主とするヴェーダンタ哲学者でもあり、「ミーマーンサー・スートラ」ではみとめない唯一主宰神としての最高我(アートマン)すなわちブラフマンを認め、人は聖典の内容やアートマンの知識を修め最高神を急想しつつ、祭祀を実行して、新しい力を得、それにより解脱の理想がかなえられると説いた。著書があると伝えられるが、散逸した。

(蒔田 徹)

シャイヤーしゅ シャイヤー種 ウマの1品種。イギリスがその原産地で、とくにリンカーンシャーおよびケンブリジシャーが中心産地である。分類の上では重種に属し、農耕用のほか重貨の運搬引用のウマで、世界の重種のなかでも最も体格の重大な体幅の広い太いウマである。体高は170cm以上で、平均173cm、体重は950～1,000kgに達する。本種は距毛がひじょうに多く、肢端をおおっている特徴があり、頭部に流星の大きなものがあり、四肢の白も多いのが特徴である。毛色は「黒鹿毛(かげ)」と「鹿毛」が多く、青毛のものはしだいに生産されなくなった。日本へはまだ輸入されたことがないので、この系統のものは存在しない。

(岡部 利雄)

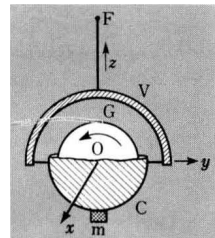
ジャイレートリークラッシャー Gyration crusher ⇨クラッシャー

シャイレンドラちょう シャイレンドラ朝 8世紀中ごろから9世紀後半にわたりジャワに存続した王朝。このシャイレンドラ Shailendra 王家の碑としてはカラサン碑(778)、クルタタ碑(782)があり、建造した仏寺にはボロブドゥル、ムンドゥット寺などがあり、この時代は大乗仏教の栄えた時期である。なおナランダー銅版(ca.860)などのインド側資料によると、シュリーヴィジャヤ国もシャイレンドラ家とするしてあり、これは、ジャワのシャイレンドラ王家の流れをくんだものと思われる。(桑田 六郎)

ジャイロコンパス Gyrocompass 磁気針儀に対して転輪針儀とも呼ばれる。ジャイロスコップが空間で一定の方向をさすのに対して、適当な方法で重力によるモーメントがジャイロスコップにはたらくようにし、それによって回転軸が地球上の一定の方向たとえば北を向くような性質をもたせたもの。右の図はそのだいたいの模型図で、回転子(転輪)Gは回転軸Oxをもち、ケースCの中に入っている。Cは通常水平である軸Oyのまわりに回転でき、Oy軸は鉛直環に連なり、鉛直環は鉛直軸zでささえられる。y方向のモーメントを加えて回転軸を水平から傾けようとする軸はxy面内で回転を起して地表面上での北の方向を中心とする歳差運動がえられる。これをジャイロコンパスの指北原理といっている。y方向のモーメントの加え方には二、三の異なる方法があるが、原理的にCの下につけたおもりmと同等の作用をもっている。実用上はこの歳差運動を早く減衰させるのが方向を知るのに重要である。そのためにさらに鉛直上方にモーメントをはたかせる。それにはCの中に風を入れ、おもりの下に両側に出口をつけて両方の出口での非対称な風の反作用を利用するものと、Cの上に同大の容器に水銀を入れてその粘性を利用してモーメントをうるのと二通りの方法がある。この減衰装置のために新しく指北性に誤差が生ずるが、これは減衰誤差といわれる。以上の二つのモーメントをどんな形で加えるかということによって数種のジャイロコンパスが生まれる。さらにこれに種種の技術的くふうを加えて現在の複雑な形のものがえられている。それらは大別して、アメリカのスペリー Sperry 式、ドイツのアンシュッツ Anschütz 式、イギリスのブラウン Brown 式に分けられる。なおこのジャイロコンパスを地球面を高速で動かすとき、したがって地球面上の運動から生ずる角速度が地球自転の角速度と同程度になった場合への一般化も容易に行うことができる。→羅(ら)針儀

(末岡 清市)

ジャイロスコップ Gyroscope 回転儀ともいう。空間中で自由回転ができるように装置された一種のこま。重心をささえられたこまでは力のモーメントが作用しないときは角運動量保存則によりそれを表わすベクトルは空間で一定である。すなわちニュートン力学でいう慣性座標系(静止座標系)たとえば恒星に固定した



ジャイロコンパスの原理を示す模型図

ジャイロスコップの構造と原理

座標系に対して大きさも方向も向きも一定にたもたれる(この角運動量の慣性に関する現象を一般にジャイロ現象とよんでいる)。このようなこまをその回転軸(またはスピンドル)のまわりに十分な角速度で回転させるものとする。地球の自転による角速度の影響は無視することができるから、こまの回転軸は角運動量の方向と一致し、したがって恒星系において一定の方向をもつことになる。しかし回転している地球上でこれを観察するときは地表面への回転軸の正射影を見ることになり、この正射影は1日の周期で東南西北の順に回転することになる。このような装置を〈ジャイロスコップ〉と名づけている。回転を見る器械の意味である。初めてこの考えに到達したのはフーコーであるが、自由回転体を作っても回転の持続ができなかった。こまに電動回転を与えて回転を持続し、地球の回転を具体的に見ることに成功したのはホプキンス Hopkins である(1878)。

【構造と原理】大体の構造は前ページの図に示してあるように、 xx' 軸のまわりに自由に回転できる回転子(または転輪)は水平環といわれる A に取り付けられる。水平環 A は水平の yy' 軸のまわりに自由に回転でき、 yy' 軸によって鉛直環 B に連結される。鉛直環 B は垂直 zz' 軸のまわりに自由に回転できるように下からささえるか、または上からつうである。こうして xx' 、 yy' 、 zz' の3軸は回転子の重心に交わるようになるから、このこまは明らかに空間での自由回転体となり、各軸の軸受はひじょうに摩擦が少なくなるように特別に注意して作られているから、モーメントは作用しないと考える。これから力学の法則により次の三つの性質が得られる。(1) モーメントがはたらかなければ回転軸は空間で一定方向をとる。(2) 回転軸に直角にモーメント N をはたらかせると、回転子は回転軸とモーメントの軸の両方に直角方向の軸のまわりに $\Omega = N/I\omega$ なる角速度で歳差運動を起す。ただし I 、 ω は回転子の慣性モーメントおよび角速度を表わすものとする。(3) 歳差運動を妨げるとき、すなわち、 $\Omega = 0$ になるようにさせるときはモーメントは0であり、歳差運動の妨害に対しては反作用はない。この3法則をもとにして考えると、直観的にわかりにくい3次元運動も理解することができる。→独楽(こま) →角運動量

【応用】第1はまずジャイロコンパスであって、広く航海、航空計器として使用されている。→ジャイロコンパス

【ジャイロスタビライザー gyrostabilizer】ジャイロスコップの原理と同じく、回転体に十分な大きな角運動量を与えて、これをたとえば船舶にのせるときはその角運動量の慣性が船の揺れを防ぐ役をする。このような角運動量の慣性を利用した安定装置をジャイロスタビライザーといい、多くの利用をもっている。魚形水雷の進行方向保持もその一例である。

【ジャイロホライズン gyrohorizon】航空機の地球に対する傾斜、したがって、重力に対する傾斜を測る目的のためにジャイロスコップを利用したもので〈人工水平儀〉とも呼ばれる。ジャイロスコップの回転軸を鉛直にして用いるが、この

ようにするための起立装置としては回転軸の摩擦を利用したもの、空気の出射による反作用を利用したものがある。ジャイロコンパスの重量を軽くして人工水平儀を兼ねたものに〈空間針儀〉Raumkompass がある。

【ジャイロパイロット gyropilot】オートパイロットともいい、ジャイロホライズンとジャイロスコップとを基として航空機の自動操縦を行わせる装置である。横ゆれ、または縦ゆれがあると、それに応じてモーメントをジャイロ系にはたかせ、それにより自動的に操縦棒を動かして航空機の姿勢を直していくものである。→自動操縦装置 →自動操舵(だ)装置

(末岡 清市)

しゃいん 社員 一般には会社の被用者をも社員または会社員と称するが、法律上では、社団なかつく社団法人の構成員を意味する。この意味での社員は社団ないし社団法人の実体すなわちその存在の基礎であって、その活動の基礎たる機関と区別される。実定法は、社員を株式会社では株主、社団法人たる特別法上の各種の組合では組合員、また取引所・商工会議所などでは会員と呼び、一般の公益社団法人・合名会社・合資会社・有限会社・相互会社では社員としている。社団法人の社員が社員としての資格で法人に対して有する地位は、ふつう社員権と呼ばれている(株式会社の場合は株主権、その他の会社の場合は実定法上持分とも呼ばれている)。この社員権については、その内容と譲渡性が問題になる。まず譲渡性についていえば、社員たる地位が経済的価値を有するか否か、およびその個性の厚薄によって、各種の社員につき、譲渡性の観念をいれる余地のないものから、譲渡の自由が絶対的に保障されるものにいたるまで、多種多様であって、法の規定もしくは当該社団の本質などに照らして判断するのはほかない。つぎに、社員権の内容すなわち社員たる地位に含まれる各種の権利は、一般に共益権と自益権の2種に大別して考えられている。共益権は、法人の管理・運営に参与することを内容とする。議(表)決権・少数社員権・各種の監督は正権・業務執行権(会社の無限責任社員の場合)などがこれに属する。自益権は、社員が法人から経済的利益を受けることを内容とする。営利法人における利益分配請求権、非営利法人における施設利用権などが、これに属する。社員権に関しては、会社法の研究上、とくに株主権を中心として、しばしば論争が展開されてきた。いわゆる社員権否認論は、共益権と自益権を包括する社員権(株主権)を、財産権でも人格権でもなく、団体的法律関係にもとづく特殊の一個の権利であるとする旧時の社員権論を批判して、共益権は社員が機関たる資格において有する権限にすぎず、会社の利益のためにのみ行使すべきものであるから、これと性質を異にする自益権をも包括して一個の権利としての社員権なる観念を認めることは妥当でないとする。しかし近時の多数説は、共益権には権利性もあることを否定せず、ただ両者に差異の存することも無視できないから、これを一個の権利としてでなく、両者の流出する源たる一個の地位ないし資

格として掌握すべきものとする。その結果、両者を包括して一括処分(たとえば譲渡・質入)することも理論上可能となる。この通説的見解は、営利社団法人には妥当するとしても、自益権を社員の固有権としない公益社団法人をも含めての社員権論としては、さらに検討の要があろう。社員権論は、なお発展の過程にあるといってもさしつかえない。

(大塚 市助)

しゃいん 車胤 ? ~ ca. 401 中国、東晋時代の政治家。字(あざな)は武子。南平(福建省南平県)の人。少時より学問を好んだが家貧しく、つねには油を買うこともできなかったので、夏の夜には多数のホタルを囊中に入れて、その光で読書したという。〈螢雪(けいせつ)の功〉とは、この車胤の故事と、おなじく晋の京兆のひと孫康が少時家貧しくして油を求めることができず、冬夜窓を開いて積雪の光で読書勉強したという故事とから出たものである。車胤はのち桓温(かんおん)に認められて仕官し、吏部尚書となったが、王室の一族である会稽王道子の子、元顕の罪を奏上しようとして事前にもれ、せまられて自殺した。

(西嶋 定生)

しゃいん そうかい 社員総会 社団ごとに社団法人の社員総会をもって構成される総会。社団内部において、その意思を決定する最高機関で、公益社団法人と、営利社団法人(会社)のうちの株式会社と有限会社とにのみ認められる。(1) 株式会社の社員総会はとくに〈株主総会〉と呼ばれるが、これについては、その項を参照されたい。(2) 公益社団法人の社員総会は、少なくとも毎年1回開かれる通常総会と、理事または監事が必要と認めた場合または総社員の1/3以上の請求があった場合に招集される臨時総会とがある(民法第60条、59条4号、61条)。監事が必要と認めてみずから招集する場合を除き、招集権者は常に理事である。いずれの場合にも、少なくとも5日前に会議の目的たる事項(議事日程)を示し、定款に定めた方法に従って招集されねばならない(同法62条)。各社員は平等の表決権を有し、総会に出席しない社員は書面または代理人によっても、これを行使する(同法65条)。決議方法は頭数による単純多数決を原則とするが、定款変更および解散は、定款に別段の定めがない限り、総社員の1/2以上の同意を要する(同法38条、69条)。社員総会の権限は、一般的には、とくに役員に委任した事項のほか、すべてに及び(同法63条)、具体的には、通知された議事日程の事項の決議に限られるのを原則とする(同法64条)。(3) 有限会社の社員総会については、株主総会の多くの規定が準用されている(有限会社法第41条)。ここにはその株主総会と異なる主要点の概観にとどめる。a. 招集については、取締役の(取締役会のではない)過半数の決議によって決定され(同法36条ノ2)、会日より1週間前(定款で短縮も可能)に、各社員に通知が発せられることを要する(同法36条)。この通知には議事日程の開示も要求されない(例外: 同法40条、63条、商法第408条)。のみならず、総社員の同意があれば、招集の手続を経ないで、総会を開くこともできる

(有限会社法第38条)。b.議決権は、出資1口につき1個であるが、定款で、たとえば頭数主義をとるなど、議決権の数について別段の定めをなすうる(同法39条)。c.決議方法中、特別決議は、総社員の半数以上で総社員の議決権の3/4以上を有する者の同意を要する(同法48条)。なお、社員総会に代わる決議方法として、書面による決議が認められていることが注目される(同法42条)。d.総会の権限についても、1950年(昭和25)の商法改正後の株主総会のように、法令または定款に定められた事項に限定される(商法第230条ノ2参照)ことなく、いかなる事項についても決議しうる。(大塚 市助)

シャヴァンヌ Emanuel Edouard Chavannes 1865~1918 フランスのシナ学者。パリのエコール・ノルマルに学び、公使館員として北京に留学(1889~93)、コレージュ・ド・フランス教授となり、終生その職にあった(1893~1918)。1903年アカデミー会員となり、04年コルディエをたずねて『通報』T'oung-pao編集主任となり、07年華北、東北地域の史跡踏査の旅にのぼった。最も有名な業績は『史記』の翻訳であるが(約1/3完了)、研究範囲はすこぶる広く、西域求法の中国僧の事績、中国来住のインド僧の伝記、仏教説話、中国美術、漢代碑文、漢晋の木簡訳読、西突厥(とっつ)史料の訳注などにわたり、貴重な貢献をした。なおその門下からはペリオ、マスペロ、カールグレンらの大家を輩出した。『司馬遷史記』Les mémoires historiques de Sema Ts'ien(5巻, 1895~1905)、『華北訪占記』Mission archéologique dans la Chine septentrionale(4巻, 1909~15)、『秦漢木簡考釈』Documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan oriental(1913)、『西突厥伝史料集』Documents sur les Tou-kiue(Turcs) occidentaux(1903)はその最も主要な著述である。

(石田 幹之助)

シャヴァンヌ Pierre Cécile Puvis de Chavannes ⇨ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ

ジャーヴィスとう ジャーヴィス島 Jarvis I. 太平洋中部、南緯0°20'、西経159°50'に位置するライン諸島中の島。長さ約3km、幅約1.5kmの環礁で、1821年にイギリスのブラウンによりはじめて報告され、当時は無人島であった。のちグアノ採取のために合衆国、ついでイギリスの支配を受け、1935年以来、合衆国が正式に領有し、気象観測の基地として使用している。(浅野 芳正)

シャウィニガンフォールズ Shawinigan Falls カナダ南東部、ケベック州南部の都市。人口24,921(1976調)。セント・ローレンス川の支流セント・モリス川にのぞむ。市の北東には高さ約50mにおよぶ滝があり、水力発電に利用されている。この電力を用いてアルミニウム精練、パルプ・製紙工業が盛んである。現在はシャウィニガンという。

(野村 正七)

ジャウジカウ Dzaudzhikau 1954年以後は旧名のオルジョニキーゼ Ordzhonikidzeに復した。ソヴェト連邦南西部、ロシア連邦共和国の北オセチヤ自治共和国の主都。人口1281,000(1977推定)。ロストフの南東約600km、テレク川にのぞむ。北方からの鉄道の終点で、グルジャ軍用道路の起点となっている。付近に産する非鉄金属の冶金工業が盛んで、とくに亜鉛・鉛の生産額が多い。農業・医学・教育の各単科大学、非鉄金属研究所がある。1784年にカフカズ山地諸民族支配のための軍事基地として建設され、グラディカフカズ Vladikavkaz と呼ばれていた。1932年オルジョニキーゼと改名され、1944~54年のあいだジャウジカウと呼ばれていた。(徳場 徳造)

シャーウッド Robert Emmet Sherwood 1896~1955 アメリカの劇作家。ニューヨーク州に生まれ、ハーヴァード大学に学び、第一次世界大戦に出征して負傷し、帰国後『ヴァニティ・フェア』誌や『ヘラルド』紙などに劇評や映画批評を書いた。『ローマへの道』(1927)の成功を機に劇作とシナリオ書きに専念した。『グリーンでの再会』(1931)を経て、『化石の森』(1935)ではアリゾナを背景としていろいろな人間の型を示した。ピューリッツァー賞をうけた『白痴のよろこび』(1936)は第二次世界大戦を予見する一種の反戦劇である。若いリンカーンを扱った『イリノイのエーブ・リンカーン』(1938)および微妙な国際関係を扱った『夜にはさせじ』(1940)もピューリッツァー賞をうけている。第二次大戦中はローズヴェルト大統領の側近として彼を助け、その活動は『ローズヴェルトとホプキンズ』(1948)に報告されている。(杉木 喬)

シャウディン Fritz Richard Schaudinn 1871~1906 ドイツの微生物学者。東プロイセンに生まれ、ベルリン大学で動物学を修めて、1894年に卒業。98年同大学講師となり、原虫類の研究に従い、アメーバについて多くの新種を発見し、大腸アメーバと赤痢アメーバとを鑑別した。1901年ベルリン衛生院に招かれ、マラリアの研究をおこなった。05年、皮膚病学者ホフマン E. Hoffmann とともに、梅毒病原体スピロヘータ・パリーダを発見した。06年ハンブルクの船員熱帯病研究所の病虫学部長となった。なおシャウディンを記念してフリッツ・シャウディン賞が、微生物学に関するすぐれた業績に与えるため設定されている。(大島 蘭三郎)

シャウプ Carl Sumner Shoup 1902~)を団長とする使節団により、1949年(昭和24)8月(第1次)、および1950年9月(第2次)に、連合軍最高司令官マッカーサーに提出された日本の税制に関する報告書をいう。いわゆる『ドッジ・ライン』による日本経済の安定化に対応しつつ、日本における恒久的な租税制度を立案することを主要な目的とし、国税・地方税を通ずる広範な税制の改革と税務行政の改善に関する意見を述べたものである。報告の主要内容は、(1)国税については、所得税中心主義をとり、これについて徹底した総合課税をおこなうこと、所得税の最高税率をかな

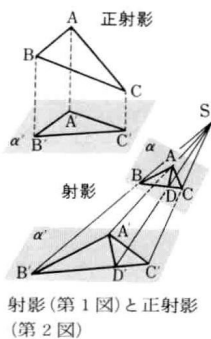
り引き下げ、その代わりに補完税として富裕税を創設すること、法人税を所得税の前払として配当所得を個人が取得したばあい配当控除を認めるとともに法人の留保所得に課税すること、資産再評価をおこない再評価税を課すること、相続税を相続財産および贈与資産について、取得者課税方式による一生を通じての累積課税とし、相当徹底した実質的財産税たらしめること、(2)地方税については国税・地方税を通ずる税源の配分を改め、付加税制度を廃止し、独立税制度を採用し、税の種目別に税源を分離し、道府県・市町村について地方財源の確立をはかること、地方財政調整のため地方財政平衡交付金制度を採用すること、さらに、(3)税務行政の面においては、青色申告制度、前年実績による予定申告制度、協議団制度の採用、などが勧告されている。この勧告は若干のこまかい点を除いて、ほとんどそのまま採用され、1950年に税制の大改正がおこなわれた。しかしその後の日本の経済情勢の推移にともなう、つきつきにおこなわれる税制改正においては、このシャウプ税制が一部廃止または変更されてきている。⇨ドッジ・ライン (神谷 克巳)

シャウリヤイ Shyaulyai ソヴェト連邦西部、リトアニア共和国の北部にある都市。人口115,000(1977推定)。カウナスの北北西170kmにあり、リガ、クライペダなどの沿岸都市へ鉄道を通ずる。リトアニア最大の皮革工場、くつ工場があり、その他農業機械・自転車・製紙工場もある。近郊にセッコウを産する。(渡辺 一夫)

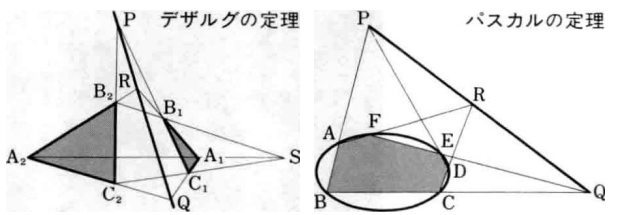
しゃえい 射影 射影という言葉は数学上いろいろの意味に使われるが、幾何学ではふつう平面 α 上に図形F(第1図で $\triangle ABC$)があるとき、 α 上にない1点Sと、Fを構成するすべての点とを結ぶ直線をつくることを、点Sから α 上の図形Fを射影するという(第1図)。こうして得られた直線の集りと、Sを通らない一つの平面 α' とのすべての交点を求めることを、この図形を平面 α' で切断するという。また、Fを α 上にない1点Sから射影し、これをSを通らない1平面 α' で切断して図形F'($\triangle A'B'C'$)をうけることを、 α 上のFを1点Sから α' 上のF'へ射影するという。とくにSが α' に垂直な方向に無限に遠いところにある場合、すなわち、F上の各点から α' へ垂線を下して α' 上の垂線の足を求める場合には、Fを α' 上へ正射影するという(第2図)。

(矢野 健太郎)

しゃえいきかがく 射影幾何学 射影と切断という操作によって不変に保たれる図形の性質(射影的性質)を主として研究する幾何学。平面上の2点間の距離、2直線間の角、2直線の平行性などは、この射影という操作で変わってしまうが、



射影(第1図)と正射影(第2図)



射影幾何学の基本定理

点、直線、1直線上の点、1点に集まる直線等の概念は、この射影という操作でもそのまま保たれている。射影幾何学で基本的な定理は、つぎのデザルグの定理とパスカルの定理である。

〔デザルグの定理〕三角形 $A_1B_1C_1$ と $A_2B_2C_2$ の対応する頂点 A_1 と A_2 、 B_1 と B_2 、 C_1 と C_2 を結ぶ直線が1点 S で交われば、対応する辺 B_1C_1 と B_2C_2 、 C_1A_1 と C_2A_2 、 A_1B_1 と A_2B_2 またはそれらの延長の交点 P 、 Q 、 R は一直線上にある。

〔パスカルの定理〕一つの円錐曲線に内接する六角形 $ABCDEF$ の相対する辺、 AB と DE 、 BC と EF 、 CD と FA 、またはそれらの延長の交点 P 、 Q 、 R は一直線上にある。

これらの定理が射影という操作で不変な図形の性質に関するものであることは明らかであろう。

射影幾何学はデザルグ、パスカルにはじまり、その後カルノー、ポンスレ、メービウス、シャール、シュタイナー、ブリュッカードの手にによって完成された。なおF.クラインは、射影という変換を、いろいろの特別な変換に制限することによって、射影幾何学から、在来知られていた幾何学、擬似幾何学、ユークリッド幾何学、非ユークリッド幾何学などを導きうることを示した。射影幾何学の公理系については多くの試みがなされたが純粋に幾何学的な公理群から出発することはシュタウト Staudt (1856) により、抽象的に束論の形を採ることはバーコフ Birkhoff による。それによれば双対原理などは束論のそれに還元されるのである。

→非調和比 →双対原理 →東

(矢野 健太郎)

しゃえじょう 舎衛城 ⇨ シュラーヴァスティ

しゃおん 舎音 朝鮮における小作地の管理人。旧朝鮮においては、地主はヤンパン(両班——文武官僚)身分のものであり、そのヤンパンの大部分は首都京城あるいは官衙(かんが)の所在地に住み、

自己の土地の管理を舎音という管理人にまかせていた。日韓併合後においても、地主の大部分はヤンパンの後身で都市に住む不在地主であって、小作地の状態すら知らぬものも多く、その管理を舎音にまかせた。大地主は、土地のある村に1名あるいは数名の舎音をおき、100人余の舎音をもつものもあった。舎音は地主の命を受けて小作人の動息を調べ、小作料の徴収にあたったが、舎音は小作地の管理について地主からいっさいの権限を与えられ、地主は舎音を通じて一定の小作料を受けとるだけで、小作人の変更、小作料の決定などは舎音の意志でおこなわれた。したがって舎音は小作人に対して絶大な力を持ち、小作人から贈与を取り、私用のための夫役を課し、契約以上の小作料を徴収して差額を横領し、気に入らねば小作をやめさせたりした。また地主に対しては、地主が小作状況を知らぬのにつけこみ、地主に納める小作料を故意に少なくし、品質不良のものにすりかえ、地主から委託された金品とくに税金を横領し、地面・地目を勝手に交換分合したりした。このような舎音が、その下に舎音をおき、舎音が何段にもかさなる場合もあった。中間搾取者である舎音が大きな力をふるったために、朝鮮の小作関係はいちじるしく過酷となり、農業経営の向上は妨げられた。この弊害を除くために1934年(昭和9)に〈農地令〉が公布されて、小作権の保護がはかられたが、なお旧習を完全に除くことはできなかった。(旗田 綱)

しゃおん 遮音 物体が存在するために音の伝搬が妨げられること。いっばんに単位面積当りの質量が大きいほど、また音の周波数が高いほど、音はしゃ断される度大きい。物体のしゃ音の程度を表すのに、透過損失という量を用いる。これは単位面積当りの質量 $m(g)$ に対し、

$$= 20 \log m + 20 \log f - 23$$

で定義される(f は周波数)。したがって、

同じ物質で厚さを2倍にすれば、透過損失は6デシベル増加する。実際には薄い物体は、音によって振動するために、前の式は成り立たない場合もある。また、異なった物質を組み合わせることによって、軽い物質で大きな透過損失を示す構造をつくることができる。→吸音材 →吸音率 →音響設計 (五十嵐 寿一)

しゃか 釈迦 仏教の開祖。もともと釈迦 Sakya (Sakya) とは種族の名であり、釈迦牟尼(むに)というべきを略して釈迦という。牟尼 muni とは聖者のことであるから、釈迦牟尼とは、釈迦族出身の聖者の意味である。仏教徒はこれを尊敬して、釈迦牟尼仏とか釈迦牟尼世尊とかよび、またこれを釈迦仏または釈尊(しゃくそん)と略称することもある。南方仏教では、釈迦のことをゴータマ仏 Gotama Buddha とよぶが、ゴータマとは釈迦族の姓である。釈迦当時の仏教外の人たちは、彼を沙門(しゃもん)ゴータマとよんでいた。

【生涯とその教え】釈迦の死没の年代に関しては、だいたい三つの説がある。(1) 前544～前543年説、(2) 前480年ころの説、(3) 前380年ころの説がそれである。セイロン、ビルマ、タイ、カンボディアなどの南方仏教諸国では第1説を採用して、これを彼らの紀年暦としている。西洋や日本で一般にひろく採用されているのは第2説である。釈迦は80歳で入滅(死没)したとされるから、第2説によれば、その生年は前560年ころとなる。それは、ヒマラヤ山ろくに位置し、いまのネパールの南方からインド領の一部へかけて国をなしていた、釈迦国の王子としてであった。当時の釈迦国は、米作農業を中心とし、現在の日本の千葉県ほどの小さな国であつたらしいが、人口はかなりあつて、領内の町や市でその名が伝えられているのも10ほどある。その町や市を領有した少数貴族の互選によって国王が定められたらしく、釈迦の父スッドナ Suddhodana (浄飯(じょうはん))はこの国の王として、首都カピラ城 Kapilavatthū (Kapilavastu) に君臨していた。母のマヤー Māyā (摩耶) は東隣コーリー国の王女で、当時の習慣にしたがつて、釈迦を出産すべく里がえりの途中で、両国の中間にあるルンビニー園で彼を生んだとされている。このルンビニー園の跡には、釈迦死後約200年余アショカ王によって建てられた刻文石柱が現存して、その地を明示し、また釈迦国内のビブラワからは、19世紀末に釈迦の遺骨(舍利)を収めた壺(つぼ)が発見され、この壺の蓋(ふた)に、古代文字によってきざまれた文章からも、釈迦が前3世紀以前に実在した人物であることが証明される。ちなみに上の舍利の一部は、日本にもわけまつられている。

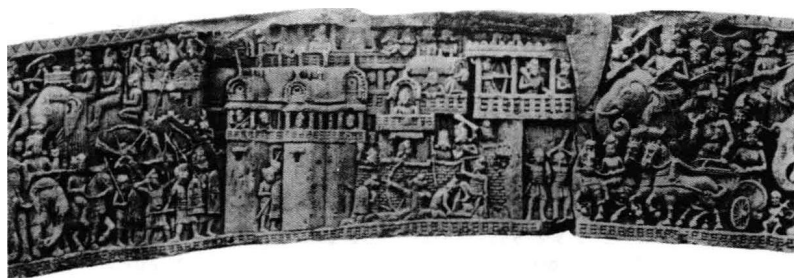
釈迦は生まれるとシッダールタ Śiddhārtha (またはシッダッタ Siddhattha) (悉達多) と名づけられ、母后は7日のちに世を去り、その後は母の妹マハーブラジャーパティーが養母として、彼を愛育した。占相者たちは、この子が常人とちがった多くのすぐれた姿かたちをそなえているのを見て、この王子は家にあれば転輪王(てんりんおう)すなわち全世界を

釈迦 上は〈絵因果経〉より、弓の練習をしている皇太子時代の釈迦。下左は敦煌出土の絹絵帳〈樹下説法図〉、下右はパールハットの欄楯柱の浮彫より〈祇園布施〉で、豪商アナータピンダダが釈迦や弟子たちのために大庭園を買いとって布施したという〈祇園精舎〉の起源の伝説を描いたもの



統一する国王となるであろうし、もし出家すれば、全世界を救済する仏陀(ぶつだ)Buddhaとなるであろう、と予言したといわれる。彼がきわめてすぐれた素質をもっていたことは事実であろう。

当時のインドの社会環境はすでに1,000年近くもつづいている正統婆羅門(ばらもん)の文化が、北西インドからガンジス川上流地方を中心として、大いに栄えていたが、それはむしろ形式化して、腐敗墮落の傾向にあった。ことに婆羅門文化の中心を離れたガンジス中流地域には、婆羅門以外の非正統文化も栄えつつあった。けれどガンジス中流の新興地域では、政治・経済の面でも、旧文化の地域とちがって、新興階級としての王族や庶民族が実権をにぎるようになった。ことに強力な国家の出現と、交通・貿易の発達による大きな都市の建設のために、国王の政治権力とならんで、豪商たちの経済権力がいちじるしくなり、婆羅門は彼らの下位にあって、寄生虫的な生活をいとなんでいた。かつては世俗的には精神的にも、社会の最上位にあった婆羅門は、今や精神界でも指導力を失い、沙門と称する非正統の求道者たちが、この新興地域に若々しい勢力をしめていた。しかし政治の面では、ふつうに十六大国といわれるような多くの国々が、群雄割拠して争奪謀略をことし、精神界では、正統・非正統の諸派が、互いに論争しあって混乱をきわめていた。ために当時は世俗的には全世界を統一する転輪王の出現が期待され、宗教的には全人類を救済指導する仏陀の出現が待望されていた。釈迦の出生によって、占相者たちが、この子に転輪王または仏陀としての望みをかけたということは、伝説にすぎないとしても、これによって当時のインドの時代環境がいかにあったかが推知できる。釈迦は父母の愛を一身に集めて、なに不自由なく家庭生活を送ることができた。転輪王を夢みている父の王によって、当時のあらゆる学問武芸などを学んだが、彼はなにごとにも傑出していったといわれる。しかし生来彼は沈黙黙想的な性格であり、深い思索にふけることが多かった。父王は彼の心を引き立てるために、寒暑雨の3時期のために、その季節に応じた宮殿を建てたり、歌舞音楽で楽しませようとしたり、美しいヤショーダラー姫を王子妃として迎えたりした。それによって、彼の心は幾分慰められ、まぎれることもあったが、しかしなお彼は世の無常を深く感じた。幸福の中にも、母後の死を思い出すこともしばしばあった。年中行事としての盛大な農耕祭では、田畑の虫や鳥などが、弱肉強食の争いをみせた。また、ものごころのつくにしたがって、当時の国際関係の不安と、釈迦国の運命とが案じられるようになった。釈迦族は勇武に富み、ゆいしよ正しい古い系統ではあったが、当時は南西に接したインド第1の大国コーサラに隷属した半独立国にすぎなかった。生殺与奪の権はコーサラ国ににぎられ、いつ滅ぼされるかもしれない運命にあった。現に釈迦国は釈迦の晩年に、コーサラ国のために簡単に攻略されたことがある。賢明な彼は、父王のようにのんきでいることはできない。感じやすい彼の頭脳は、これらの多くの理由に



釈迦 サーチーの塔門の浮彫より〈仏舍利分配図〉

よって、世の歓楽を手放して享受するわけにはいかない。自分の、自国の将来について、また人類一般の悲しむべき運命について、考察するようになった。彼が王室の園林を遊覧すべく宮門を出ると、あるときは道ばたに力なくあえぎ衰えた老人に、あるときは痛み苦しんでいる病者に、あるときは親類縁者のなげき悲しむ死者に、あるときは神々しいまでに聖なる出家者に、出会ったとされる〈四門出遊〉の説も、伝説であるにせよ、彼の心におこった、人類一般の運命への観察をしめすものであろう。どうすれば自分は、人類は、この運命を克服することができるか。すでにヤショーダラーとのあいだに1子ラーフラRāhulaが生まれていた。家系を断たないことが、インドでは家主たる者の第1の義務であったから、今や安心して家を出ることができた。王宮の人たちの期待にもかかわらず、彼は妨害をおそれて、夜半ひそかに王宮をのがれ出た。国境に達して、従者と乗馬とを帰して、自己の決意を父王に告げさせた。王宮では掌中の玉をうばわれたように悲嘆にくれたが、太子に翻意のないことを知って、その意志にしたがわしめた。古いたしかな資料によれば、そのとき釈迦は29歳であった。

彼は当時修道者たちの多く住んでいる南方マガダ国をさして行った。マガダはガンジス川の南にあって、北西にあるコーサラ国について、当時の新興強大国であった。釈迦が当時の修道者たちの習慣にしたがって、首都ラージャガハRājagaha(ラージャグリハ、王舎城)の街路を托鉢(たくはつ)しているのを宮殿からながめた国王ビンピサーラBimbisāraは、常人とちがった釈迦の外見や態度にひかれ、わざわざ郊外に食事を終えた彼をたずね、その素性(すしょう)をきき、政治や軍事の面で自分に協力してくれるようにとたのんだが、釈迦は求道の決意をのべてことわった。王はしかたなく、修行が完成したら、自分を教え導いてくれることを頼んだ。はたして後この王は釈迦の教えにしたがい、熱心な信者となった。

この付近にアーラー、ウッダカという2人のすぐれた修行者がいた。ともにきわめて高い禪定(精神統一)を得た人で、彼らはこれをさとり理想境であるとなし、人々を指導していた。釈迦は子どものころから精神統一は得意であったので、この2人に禪定を学んでも、すぐに彼らとおなじ境地に達した。しかしそれでも彼の心は安まらず、これをさとり理想境とみることはできなかった。禪定や学問における最高者に学んでも、理想が達せられないとすれば、当時一般に、さとりへの道としておこなわれていた苦行を試みるよりほかに方法がない。そこで彼は

苦行者たちが集まっている苦行林に行つて、あらゆる苦行を6年間もつづけた。ふつうの人がなしえられないような、最もはげしい苦行を試みて、その死が伝えられたこともあった。しかしいっこうにさとり理想境は得られなかった。この体験によって知られたことは、死にいたるほどまでも肉体を極端に苦しめることは、それによって心の平安が得られるものでなく、かえって心がみだされる。心の安静はむしろ健全な肉体によってでなければ得られないということであった。そこでそれまでの苦行をすて、垢(あか)づいた身を付近の清流で洗いきよめ、村の婦人がささげた牛乳の粥(かゆ)をたべて、弱りきった身体もしだいに回復した。6年間彼と行動をとるとして、彼の苦行に感嘆するとともに、今に彼がさとりをひらくであろうと期待していた5人の従者は、彼の態度をみて、彼がまったく墮落したものと思い、望みなしとして、遠く西方ベナレス(ヴェラナシ)へ去った。体力を回復した釈迦は、付近の1樹下に端座し、ここで宇宙人生の真理をさとって、仏陀となった。ときに35歳であった。仏陀とは覚者、すなわち真理をさとした者の意味である。この地はブッダガヤーBuddhagayāとよばれ、彼がその下にすわった樹木は菩提樹(ぼだいじゅ)とよばれるようになった。彼は覚者となると、その喜びのため、またそのさとりの内容を反省し、かつこれを世人に説きしめす方法を考察するなどのために、7週間坐禅(ざぜん)をつづけたとされている。その間、この新しく発見された真理は、あまりにも深遠なものであるから、俗事におぼれている世人は、とても理解できないだろうから、その宣布を放棄しようとして考えたが、さらに思いなおして、この真理を解する者も多少はあるだろうし、またこれを通俗平易に説くことによって、他の人たちにも受けいれられるであろうと考えて、伝道の決意をした。さて誰に説いたら理解されるだろうか。むかし彼が師事した2人の仙人(せんじん)はすでに世を去っていた。つぎに思いあたるのは、6年間彼につかえた5人の比丘(びく)である。そこで彼らのいるベナレス郊外の修行者の集まっているミガダヤMigadāya(鹿野苑(ろくやおん)、こんにちのサルナート)に行った。5人ははるかに釈迦がくるのをみて、互いに誓って、墮落した彼を立てて迎えないことを約したが、その威力に打たれて、思わず彼を迎え、洗足の水を出し、座席を用意した。それでも内心は彼を軽べつしていたが、やがて彼らに法が説かれるにしたがって、釈迦が最高のさとりを得て仏陀となったことを知り、その教えにまよって、彼らもまたさとりを得て、阿羅漢(あらかん)arhat

という最高の聖者となった。そこで釈迦をはじめとする6人の阿羅漢ができた。ここで説かれた釈迦最初の説法を転法輪(てんぼうりん)という。これは転法輪王がその輪宝を転じて全世界を征服するにたとえて、仏が説法することを、法輪を転ずるといったものである。この最初の説法では、仏教の根本教理としての〈四諦八正道(したいはっしょうどう)〉が説かれた。ちなみに釈迦が菩提樹下で観察した世界人生の真理は、〈縁起説〉といわれる仏教の根本教理であるが、四諦説も、縁起説の一種であり、縁起説をわかりやすく説きしめたものにすぎない。やがてベナレスで、この町の豪商の子のヤサおよびその友人の3人、さらに彼ら商人仲間の青年50人が仏の教えをきいて出家し、60人余の阿羅漢ができた。釈迦はこの仏教を、なるべく広く、1人でも多くにきかせるために、彼らひとりひとりが各地方に行くように命じ、2人以上がいっしょに歩いてはならぬといった。ここに一般世人に対する仏教の伝道活動がはじめられた。釈迦自身もマガダ国の王舎城にむかったのであるが、途中で、遊樂にうつつをぬかしていた30人の青年に、真の自己を求めよといって、彼らを教導して出家させ、マガダでは、当時この国で、年齢的・人格的に最も尊敬されていた3人兄弟の拜火婆羅門を、その徒1,000人とともに仏教に帰依させ、やがて国王ビンピサーラを教化した。王は増大する仏教教団のために、王園を寄進し、それが有名な竹林精舎(ちくりんしょうじゃ)となった。ついでこの地方の若い修行者であり、のちに仏の後継者となったマハーカッサパ Mahākassapa(摩訶迦葉(まかしょう))を弟子にし、さらに仏の二大弟子として有名な、サーリプッタ Sāriputta(舎利弗(しゃりほつ))、モッガッラーナ Moggallāna(目健連(もっけんれん))の2人も、その徒250人とともに仏教教団にはいった。この2人はともに婆羅門出身の青年であったが、正統婆羅門の教えに満足できず、新しい法を求めて、サンジャという沙門の弟子となったが、それでも心の満足が得られず、さらにすぐれた教えを求めていた。そのとき、5比丘の1人であるアッサジ Assaji が王舎城の通りを托鉢しているのを見て、そのいかにも落ちついた態度、すがすがしい顔かたちに驚き、これこそ自分らが求めているものにちがいないと思って、彼にその教えをこうと、自分は出家後日浅くして十分に説くことができないが、自分の師である大沙門はこのように説いているといつて、簡単な語句を述べた。賢明なサーリプッタはこの1語句によって、仏教のすぐれた特徴を知り、釈迦のところへ行って出家を願ったとされている。当時ガンジス中流地域には、新興の非正統沙門として、6人のすぐれた指導者があった。サンジャもその1人であるが、なかでも最もすぐれて、その教えが後世までも栄えたのは、ニガンタといわれるジャイナ教祖マハーヴィーラ Mahāvīra である。彼も釈迦とおなじく王族の出身で、釈迦が活躍したとおなじ地域を、おなじころに教化して歩いた。しかし両教が伝える古い記録によってみても、この2人は直接には面識もなく、相会する

こともなかった。ただニガンタの弟子たちは、釈迦やその弟子たちと相会して、さかんに問答往來した。ニガンタの信者が、釈迦を論破すべくやってきて、かえって釈迦に説伏され、ジャイナ教をすてて仏教に帰依した例もいくつか伝えられている。とにかくガンジス中流地域では、若い沙門ゴータマの名声は急速にひろがり、数年ならずして、大きな教団をなすにいたった。釈迦の弟子のなかには、この地域での最もすぐれた青年たちが、他の婆羅門教や沙門団のなかから集まり、名声をきいて、遠く北西インド、西インド、南インド方面から釈迦を慕って弟子となった者もあった。故郷の釈迦族からも、多くの有名な弟子が輩出した。従弟のアナーンダ Ānanda(阿難)、アヌルッダ Anuruddha(阿那律)、異母弟のナンダ Nanda(難陀)、子のラーフラ Rāhula(羅睺羅(らごら))らはそれであり、のちに釈迦にそむいたデーヴァダッタ Devadatta(提婆達多)も彼の従弟である。在家の信者としては、マガダ国王ビンピサーラをはじめとして、コーサラ国王パセーナディ Pasenadi(波斯匿(はしのく))があり、各地の豪族富商らも多く仏教を信奉し、彼らによって仏教寺院が建立された。コーサラの首都シュラヴァスティ Śrāvastī(舎衛城)には、給孤独長者(きこどくちやうじゃ)の建てた〈祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)〉や、信女ヴィサーカーの建てた〈鹿母講堂(ろくぼこうどう)〉があり、その他ヴェンサ国の首都コーサンビーの〈ゴーシタ園〉、ヴァッジー国の首都ヴェーサーリーの〈大林重閣講堂〉など、枚挙にいとまがない。このようにして、仏教は出家の弟子と在家の信者との両者から成り、出家の教団は一般民衆を指導教化する専門家の集団であり、民衆は在家の信者として、専門家から精神的に指導救済を受けるかわりに、出家者に対して、物質的に衣食住などを布施供養した。両者は精神物質の面で相互に支持しあいつつ、そこに幸福平和な理想社会を現わすことを目的とした。その目的はしだいに達せられ、仏教は当時の正統・非正統の宗教団体のなかで最大の勢力をめた。その隆盛をねたみ、釈迦を非難したり、陥れようとしたりする者があったが、いずれも失敗に終り、釈迦の名をいっそう輝かすにすぎなかった。出家教団は最初、比丘(男僧)のみであったが、のちに比丘尼僧団も発生し、その戒律規定も別個のものが作られた。

釈迦は成道(じょうどう)一さとりをひらくこと)ののち、80歳で死ぬまでの45年間、つねに諸地方を巡歴し、1ヵ所に定住することなく、あらゆる階層の人々にその教えを説いた。上は国王大臣から下は不可触の賤民(せんみん)や貧女にいたるまで、賢者愚者をとわず、良民から悪賊鬼畜の類にいたるまで、いっさいの人々を救済した。彼の活躍の範囲は、ガンジス川中流地域一帯であり、およそ南北500km、東西800kmにおよぶ地方であった。婆羅門教から出家した教養ある兄弟の比丘があった。彼らはこのすぐれた教えを卑俗の言語で説くことは、仏教の冒瀆(ぼうとく)になると考えて、釈迦にむかって、婆羅門教の聖典に使用されている文法、正しいサンスクリットで仏教

を説くようにと願った。婆羅門教では、その教えの尊厳を保つため、一部の知識階級にだけしか理解されないサンスクリットでその聖典を伝え、これを下層民に教えかせることを禁じていた。仏はこの兄弟の要求をしりぞけ、比丘たちに、仏教はかならず民衆の日常語で伝うべきであり、絶対にサンスクリットをもちいてはならないと命じた。それは種族・地位・階級・職業の別をとわず、あらゆる人々に仏教を伝え、これを理解させるためであった。この命令は後世までもまれて、仏教がインド各地にひろがり、さらに諸外国に伝わったばかりにも、その経典はかならずその地方地方の通俗の民衆語で伝えられることになり、それが仏教が世界宗教となった1因をなした。またインドでは、仏教以前から今日にいたるまで、階級制度がきわめてやかましい。釈迦は、人間の尊さや価値は、生まれや階級・職業にあるのではなくして、その人の行為いかんにあるとなし、いかに尊貴の生まれでも、悪い行為をなせば賤民であり、どんな下層民でもその心や行為が正しければ、尊貴の者であるとした。したがって仏教教団にも、あらゆる階層の者をひとしく入団させ、出家後はその行為や能力にしたがって序列を定め、そこに人種や階級による差別を全くつけなかった。ちょうどインドの四大河が大海にそそげば、おなじく海水とよばれるように、四つの階級から出家した者も、教団にはいればおなじく釈子(釈迦の弟子)であるとした。これは人格の尊厳と人間の平等とを強く主張したものであった。仏教の平等主義は、古来の風習を重んじ、階級制度をやかましくいう正統婆羅門の態度と全く相反するものであり、仏教が広く民衆にうけいられ、さらに諸外国にまで伝わった1因をなすものであるが、また伝統の力の強いインドの土地で、仏教ののちにほろびるようになった1因をもなしている。釈迦の教えのもう一つの大きな特徴は、それが合理的であることである。釈迦はみずから発見した縁起説は、宇宙人生の永遠の真理であるが、それまで誰によっても説かれなかった独特の教えであると自任していた。しかし、自分が新しい宗教をはじめるという意識はかならずしもなかった。むしろ昔からある婆羅門教を真に復活させるものであると信じていた。したがってその教説や用語のなかには、婆羅門教的なものが少なくない。もっともその教説や用語にしても、古いものを使用しながらも、そこに新しい意義と価値をあたえることによって、内実的には、古いものと全くちがった新しいものとなっていた。それは釈迦の教えが、理論の面においても、実践修道の方法においても、それまでの不合理や迷信を排して、合理的であった点にある。その合理性は今日からみても、近代性をおびているときえいうことができる。仏教が世界的宗教として発展した大きな理由はここにもある。

釈迦は釈迦国とマガダ国の中間にあるクシナラー Kusinārā(拘尸那羅)(クシナガラ Kuśinagara)といういなか町で80年の生涯を閉じた。その遺体は荼毘(だび)火葬に付されて、その舍利は、生前に彼と関係の深かった諸方の国王や種族

などのあいだに8等分され、各地で舍利塔を建ててまつることになった。ピブラワで発見された舍利もその一つであろう。200年後のアショカ王は、7ヵ所の仏舎利をわけてまつり、インド全国に84,000の塔を建てたといわれる。釈迦を慕う人たちは、この舍利塔崇拝のほかに、彼の遺髪、歯、足跡、仏鉢(ぶつぼつ)などをもまつり、また菩提樹の崇拜もなされた。さらに彼の生まれたルンビニー園、成道したブッダガヤー、最初の説法地ベナレスの鹿野苑、入滅の地クシナラーは四大霊地として、在家・出家の信者たちによって巡拝されたが、この風習は後世までもつづけられ、今なお仏教徒の巡拝はたえない。ちなみに釈迦の誕生、成道、入滅の月日に関しては、最古の文献はなんら伝えていない。中国、日本では、誕生を4月8日、成道を12月8日、入滅を2月15日としているが、南方仏教国では、誕生、成道、入滅ともにヴェーサーカ月(4～5月)の満月の日にあたるとして、この日に「ヴェーサーカ祭」(南方仏陀祭)という記念式典をもって、盛大に諸行事をおこなっている。

【その没後】釈迦が没すると、残された多くの弟子のうち、500人の最もすぐれた阿羅漢たちは、その教えが正しく伝えられるために、マガダ国王舎城外において、3ヵ月間一堂に会して、釈迦の教法としての「法と律」を結集(けつじゅう)した。いわば仏典編さん会議である。当時のインドには、すでに文字がおこなわれていたが、昔からの風習にしたがって、仏典もすべて口誦(こうじゅう)記憶によって伝えられ、それが筆録されたのは400～500年後のことらしい。この会議ではマハーカッサパが議長となり、アーナンダが法を、ウパーリが律を誦(じ)し、一同がその誤りのないことを証明するという風であった。ここに法 dhamma とは、釈迦が生涯のあいだに説いた説法をさし、これはのちに「阿含経(あこんきょう)」としてまとめられた。律 vinaya とは、仏教の出家教団の日常生活を規定した法則であって、仏教の出家教団は律の規定にしたがってその統制を保つのであり、教団生活にはなくてはならないものである。仏の説法を集めた「阿含経」や「律蔵」(律の集録)は、釈迦の生涯のできごとや当時の事情を比較的忠実に伝えていて、原始仏教や釈迦の研究には、最も重要な資料をなしている。中国、日本の大乘仏教の説によれば、仏教の経典は小乗のものも大乘のものも、すべて釈迦が一代のあいだに説いたものであるとされた。しかし実際には、小乗経といわれる「阿含経」の原形だけが釈迦の直接の説法であり、大乘経といわれるものは、釈迦死後400～500年以後、数百年間にわたって作られたものにすぎない。もっとも大乘経典も釈迦の真意をしめそうとしたものであって、大乘思想の芽は多く「阿含経」のなかに見いだされるものであるから、大乘経典も釈迦の思想精神を逸脱したものとは必ずしもいえない。

西洋の仏教研究者たちは、原始仏教の説にしたがって、釈迦のことを単に「仏陀」とよぶけれども、後世の仏教とくに大乘仏教になると、仏陀は釈迦のみにかぎらず、過去にも未来にも無数の仏陀が

あり、また現在もわれわれの住む世界以外に多くの世界(他土)があって、それらの世界にも仏陀があるとされている。さらに仏陀に関する哲学的考察がなされるようになると、仏陀に法身(ほうしんー原理的な理法としての仏陀)、報身(ほうじんー具体的・人格的に完全円満な理想的仏陀)、応身(おうじんー特定の時代や地域に応じた仏陀)の三身があるとされ、釈迦は2,500年前のインドという特定の土地・時代に応じて現われた応身の仏であるとされる。三世の諸仏といわれるものはすべて応身仏である。ちなみに阿彌陀(あみだ)仏は報身であり、大日如来は法身とされる。

釈迦については、彼に関係した彫刻や絵画がインド、中国、日本をはじめ、すべての仏教流通地域に数多く残されているが、インドの早いころのものは、釈迦の像を描くことをせず、彼の存在をしめすために、法輪や仏足跡などをもってしている。それは完全な人格者としての釈迦を表現することは、人間にはとても不可能であり、したがって釈迦の姿を不完全に描くことは不敬になるから、これを直接描かなかったのであろう。しかし西暦紀原ころになると、ギリシアの彫刻様式が北西インドに伝えられ、いわゆるガンダーラ式彫刻が発生するようになり、釈迦の像もきざまれるようになり、それがさらに2世紀ころのマトゥラー式彫刻をへて、4世紀以後のグプタ式に発展すると、最も洗練された釈迦像がきざまれるようになった。これらの彫刻は、中央アジアから、中国、朝鮮をへて、日本の飛鳥(あすか)、白鳳(はくほう)、天平時代の彫刻へと影響したことは、広く知られているとおりである。→別刷図版・釈迦 →仏陀 →仏像 (水野 弘元)

しゃが *Iris japonica* アヤメ科の常緑多年生草本。直射日光のあたらない林下の湿地に生じ、またときに庭に植えられる。地中または地表にやや太くて長いほふく枝があり、その先端に数葉を生ずる。葉は2列に並び、剣状で、長さ20～40cm、幅2～3cm、基部は跨(こ)状に互いに抱き、先端がとがり、鮮緑色で光沢がある。花は淡青紫色で、大形の総状花序をつくる。包葉は緑色鞘状で、アヤメに似ている。花はややアイリスに似ていて小形で、径5～6cm、朝開き夕方しぼむ。花被片は6個で平開し、外側の3個は倒卵形で先端がくぼみ、中央に黄色の斑があり、内側の3個は倒卵形で先端が浅く2裂している。花柱枝は3個で花被状をなしており、その裏側に雄しべがある。果実は熟さない。本州、四国、九州に分布する。(小山 鉄夫)

ジャガー *Jaguar Panthera onca* アメリカ産のネコ科のなかで最大の猛獣。アメリカヒョウともいう。ヒョウによく似ているが、体はがんにょうで、四肢と尾が短く、頭は大きく、眼窩(がんか)の内縁に特有の突起がある。頭胴1.2m、尾63cmくらい。体の地色はふつう美しい黄かっ色で、ヒョウに似た黒点があるが、黒点は大きな輪を形成し、その中央に一、二の黒点を有する点が異なる。ときに地色が暗かっ色または黒かっ色で、黒斑

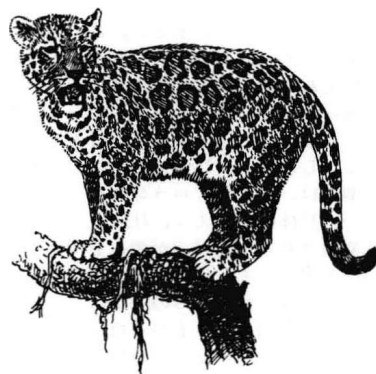
の目だたないものがあり、ふつうの色彩のものよりやや大形で性質が荒いといわれるが、別種ではない。テキサス、メキシコからブラジルを通り、南はパタゴニア北部まで広く分布し、多くは森林に住み、木登りがうまい。また好んで水に入る。きわめて力が強く、ウシ、ウマ、バクなどを殺すが、主食はシカ、オオアリクイ、サル、鳥、魚、カメ等。まれに常習的<人食い>となるものがある。ふつう単独で生活し、12月ころ2～4子を産む。(今泉 吉典)

しゃかい 社会 society という言葉は、世間ないし世の中という言葉に代わって用いられるようになったものであるが、日常の用語として多義的に使用されている。たとえば、〈学校から社会へ〉〈社会人〉〈実社会〉などといわれる場合と、〈上流社会・下層社会〉〈われわれの社会では〉という場合と、〈国家と社会〉〈政治経済社会〉〈社会面〉などという場合とでは、それぞれニュアンスを異にする。また、社会科学一般あるいは社会学の用語としても、(1)人間の結合・関係・生活・共同などの一般的抽象的な意味での社会、(2)家族や国家も社会のひとつであるというような意味での社会集団、(3)このようななんらかの組織をもつ社会集団以外に潜在的集団とよばれる階級、非組織的集団といわれる群衆や公衆などをもふくむあらゆる社会生活形態、(4)日本の社会というように、地域社会の一定の極限としての全体社会、(5)封建社会・近代社会といわれるように、特定の発展段階をなす社会体制、などの意味をもっている。しかし、いずれにしても、それらは、人間が他の人間と関係し結合して共同生活をいとむことから由来しているのであって、この共同生活その諸側面が社会という言葉でいいあらわされているわけである。

社会の原語ソサエティ society(英語)、ソシエテ société(フランス語)、ゲゼルシャフト Gesellschaft(ドイツ語)は、すべて〈結合する〉という意味をもっているが、この原語が明治初期に日本につたえられたとき、それは〈仲間〉〈交際〉〈会社〉〈世態〉などとも訳された。その後1881～82年(明治14～15)ころには、社会という語が定訳となり、こんにちに至っているが、忠孝一本の道徳が強調され家と国が最も尊重された第二次世界大戦前の日本では、社会という語は社会主義との連想もあってあまり歓迎されずむしろ忌避された言葉であった。なお、この語が最初に使用されたのは、1875年福地桜痴によるといわれている。それは、土地



しゃが



ジャガー